

# とある魔術の転生者《リンカーネイター》

牛丼肉なし

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とあるシリーズの世界に転生した主人公、時雨蒼空。そんな蒼空がお馴染みの登場人物達と様々な事件に巻き込まれていく話です。

基本的に原作に沿って進みます。その内オリジナルのエピソードも書くかも？

ヒロインは未定です。(ハーレムにはするつもり。苦手な方は御容赦を)

主人公は前世の記憶ととあるシリーズの知識を持っている、というよりはこういうアニメがあつたよなというレベルです。アニメも軽く見たことがあるぐらいで、部分的なものしかありません。前世の全ての記憶を覚えてるわけでもないです。

# 目次

## 第一章

00話	プロローグ	1
01話	魔術師は塔に降り立つ	9
02話	魔術師は塔に降り立つ	15
03話	魔術師は塔に降り立つ	21
04話	魔術師は塔に降り立つ	27
05話	魔術師は塔に降り立つ	36
06話	魔術師は塔に降り立つ	44
07話	魔術師は塔に降り立つ	54
08話	魔術師は塔に降り立つ	63
09話	魔術師は塔に降り立つ	74
10話	魔術師は塔に降り立つ	85
11話	奇術師は終焉を与える	91
12話	奇術師は終焉を与える	97
13話	奇術師は終焉を与える	105
14話	奇術師は終焉を与える	110
15話	奇術師は終焉を与える	117
16話	奇術師は終焉を与える	128
17話	奇術師は終焉を与える	133
18話	奇術師は終焉を与える	138
19話	奇術師は終焉を与える	146
20話	魔道書は静かに微笑む	158

# 第一章 00話 プロローグ

【学園都市】

東京西部に位置する完全独立教育研究機関。あらゆる教育機関・研究機関の集合体であるその都市は、総人口約230万人、その8割が学生である。

この都市で暮らす学生にはそれぞれの学校の『カリキュラム時間割り』に超能力開発が組み込まれている。

学園都市 第7学区 7月 19日

夏休みも目前まで迫った今日、すでに最終下校時間は過ぎていているが、中等、高等学校の生徒のほとんどが住むここ第7学区は心做しかどこか浮き足立っているようにも感じる。学園都市の学生といえど、そこは普通の学生とも変わらない。

日の沈んだ街を歩く、白い髪と切れ長の青い眼が特徴的な、整った容姿をした少年、——時雨しぐれ 蒼空そらも夏休みを前にして確かに心を踊らせていた。

蒼空は数日分の食料品や、その他日用品などの買い出しを終え、自宅である男子学生寮に向かっていた。

「あつっー……」

そう呟き、蒼空は手でパタパタと扇いで申し訳程度の風を自身に送る。

もう日は沈んでいるとはいえ、7月も半ば、暑いのは仕方ない。能力を使ってさつきと家に帰ろうか、そんなことを考える。蒼空の能力なら、文字通り「あつ」という間に家に着く。そんなことを考えた時だった。

「不幸だあー！ー！ー！」

そんな聞き覚えのある声が響いた。声のする方を見ればそこには数人の不良に追われるツンツン頭が。

「この聞き覚えのある声は……相変わらず、だな」

どうしたら日常茶飯事的に複数人に追われるような状況に陥るのか。関心半分、呆れ半分で呟く。

「よつと」

蒼空は自身の能力を発動する。

「おつす、カミヤん」

すると次の瞬間、蒼空の姿はツンツン頭の少年、—— 上条 当麻の隣にあった。そのまま蒼空は上条の隣を並走する。

「時雨っ!？」

突如として隣に現れた蒼空に驚き、間拔けな声をあげる。

「いやー、今日も平常運転ですねえ。それで、今日は何しでかしたんだ？」

「どうして君はいたいけな友人が怖い顔の人達に襲われている時にそ

んな笑顔で話しかけて来る事が出来るんですかあ!？」

蒼空の質問に答えている暇など上条にはない。息を切らしながら全力疾走する上条は自身の必死な表情とは全く逆の笑顔で話しかけて来た蒼空に向かって吠える。

「どうしてって、よく見る光景だからな」

蒼空はそんな上条に向けて、当然のようにそう返した。

「酷いー」

「まあまあ、ちゃんとお助けしますよ」

何も面白がるためだけに上条の隣に来た訳ではない。それならわざわざ能力を使って隣になんてやって来ず、遠くからケラケラ笑いながら眺めている。最初からちゃんとお助けするつもりだったとも。

再び蒼空は自身の能力を発動させた。その瞬間、蒼空と上条の姿はその場から消えた。



「ここまで来れば大丈夫だろ」

蒼空と上条の姿は先程までとは全く別の場所にあった。都市部を離れた所にある大きな川。

大きな川には大きな鉄橋が架かっている。長さにしておおよそ150メートル。車はない。ライトアップもされていない無骨な鉄橋は、夜の海のような不気味な暗闇に塗り潰されている。

「はあ……はあ……助かったぜ、時雨」

さつきまでの猛ダツシユで乱れた息を整えながら上条は蒼空に礼を言う。

「どういたしました。それで今日はなんであんなことに？」

「はあ……ビリビリだよ。ビリビリ」

上条はどこかうんざりしたように言う。

「ああ、あの常盤台の」

ビリビリ、という言葉で蒼空も理解した。上条の言うビリビリとは、静電気とか、正座をしていたら足が痺れたなんていうようなビリビリした現象ではなく、とある人物のことを指す。

その人物こそ御坂美琴、この学園都市では有名人の一人だ。と言っても他の人間にビリビリと言っても伝わらないだろうが、御坂美琴と言えばこの学園都市ではほとんどの人間が知っていることだろう。

「そうそう。アイツまた絡まれてたんだよ」

「そこを助けたと。前回のことはもう忘れたのか？」

上条は1ヶ月程前にも同じように不良に絡まれている美琴を助け、その時のかくかくしかじかが原因で今日に至るまで顔を合わせては追いかけて回され、一方的に因縁をつけられ、勝負を挑まれている。

「忘れてねーですよ。だから今日助けたのは不良達の方だ」

「なるほどね。それで追われてたのか。ハハ、相変わらずだな」

「晩飯も食い損ねたし……はあ、不幸だ」

上条はファミレスで食べ損ねた夕食の『苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア』に思いを馳せながら呟く。

「不幸だ」というのが上条の口癖である。実際、上条は客観的に見ても不幸である。さつきまでのように日常茶飯事的に複数人の不良に追いかけて回されたり、じゃんけんの勝率がほぼ0だったり。

(不幸ね。知ってはいたけど、ホントに大変そうだよな)

蒼空は上条の不幸の理由を知っている。何故か、それは蒼空が転生者だからであり、この世界をアニメとして見ていたからだ。

しかも同じ世界でも異世界でもなく、蒼空からすれば創作物の中の世界に転生するという超特殊な転生だ。一種のパラレルワールドのようなものだろうか。

最初はぼんやりと、夢のような感覚で朧気に前世の記憶がある、というレベル。それから歳月を経たり、何らかのきっかけで前世の記憶を取り戻す、といった感じだ。

全くもって信じられないような話だが、これは事実。考えてもなぜ転生したのか理由も何もかも不明なので、蒼空はもう仕方ないと納得している。

最初は自身からすれば物語の人物と関わるといっことは違和感しかなかったが、今はそれも無い。上条に対してもそうだが、物語の人物ではなく、意思ある一人の人間として接している。

「見つけたアア！」

蒼空と上条以外には誰もいないはずのこの場所に、高い声が響いた。

「げっ、出た！」

声の主を見て上条が思わずそう漏らす。蒼空も声が聞こえてきた



方向に視線を向ける。そこには一人の少女が立っていた。灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターという格好の、中学生ぐらいの女の子だ。

御坂美琴、それが少女の名前だ。上条の「げっ」という何か見てはいけないものを見たような反応を美琴は見逃さなかった。

「人をお化けみたいに言うんじゃないわよ。今日という今日は逃がさないわ」

「はあー、毎度毎度、ことあるごとにレベル0の無能力者を追いかけて回して何が楽しいんですかあ?」

「レベル0の無能力者? だったらなんで……」

美琴の周囲に電気が発生する。

「レベル5の超能力が効かないのよ!!」

美琴が叫ぶと同時に、蒼空と上条に向けて凄まじい電撃が放たれる。正確には上条に向かって放たれたものだが、明らかに蒼空も巻き込むであろう威力だ。

【超電磁砲<sup>レベルガン</sup>】。発電系能力の最上位に位置するレベル5の超能力こそが、御坂美琴の能力である。

(おっかねー。というか人間にそんなもんを向けるなよ)

と、蒼空は心の中で呟く。しかし、その言葉とは裏腹に慌てた様子は一切ない。なぜなら蒼空の隣には超能力などといった異能の類を打ち消す力を持った上条がいるから。

美琴の放った電撃が上条の右手に触れた瞬間、何かが壊れるような音が鳴り響き、打ち消される。

【幻想殺し】 上条の右手に宿るそれは異能の力を打ち消す力である。異能であればレベル5の美琴の力でさえも打ち消す。そんなとんでもない力を持った上条がレベル0なのは、異能を無効化するという能力の性質上、上条自身が能動的に何か現象を発生させるわけではない。例えば美琴が電撃を発するように。

「ナイスバリアー！」

蒼空は上条に向けて笑顔でサムズアップ。

「あのねえ！ 防げると分かっているもめちやくちや怖いんですよ!? ちよつとは能力で助ける姿勢を見せろよ！ 頼むから見せてくださいー！」

迷うことなく自身を盾にした蒼空に向けて上条はまくし立てる。

「ビリビリお前もお前だ！ そんなものを人間に向けて放つんじゃないやねえー！」

「アンタピンピンしてるでしょーが！」

「そういう問題じゃねえ！ もういい時雨、逃げるぞ」

「いいの？」

「どうせアイツは言っても聞きやしねーよ」

再び放たれた電撃を右手で打ち消しながら上条は言う。蒼空もハッスルしている美琴を見て上条の言葉に納得する。確かに何を言っても美琴の耳には届かなさうだ。

蒼空としてはこのままこのやり取りを眺めていても構わないのだが、不良達との全力鬼ごっこに免じて上条の提案を受け入れた。

「りよーかい」

蒼空がそう呟いた瞬間、蒼空達の姿は美琴のすぐ後ろにあった。

「というわけでビリ娘、今日はここまでだよ」  
「なっ!?!」

後ろから聞こえてきた声に美琴が驚きながら振り向いた時、既にそこには蒼空と上条の姿はなかった。

「お……覚えてなさいよーっ!」

その場に一人残された美琴の声だけが響いた。

# 01話 魔術師は塔に降り立つ《1》

学園都市 第7学区 7月20日

「ごめんくださいーい！ 時雨さーん！」

扉の外から激しいノックの音と共に聞き覚えのある声が聞こえてくる。その音で蒼空は目を覚ます。

「時雨さーん！ 時雨蒼空さーん！ 頼むから起きてくださいーい！」

今日は夏休み初日。学校に登校する必要が無くなったことを記念し、昼ぐらいまでグツスリ寝ようと思っていたのに、目覚めが同級生男子のモーニングコールとは最悪の目覚めだ。昼までの睡眠時間を見込んでいたため、昨日夜更かしたのが余計に辛い。

蒼空はまだハッキリとしない意識のまままで重たい体を引き摺りながら玄関まで向かう。玄関の扉を開くと、そこには慌てた様子の上条が立っていた。

「やっと起きた！ 夏休みだからといって生活習慣を……いダダダ、痛い！ ごめんなさい！ 今度お詫びはさせていただきます！ だから無言でアイアンクローするのを止めて！」

蒼空は上条の顔から手を離す。

「……朝から何の用だ。補習があるお前と一緒にするなよ？」

残念ながら成績の奮わない……というかそもそも出席日数すら危うい上条さんは夏休み初日から補習のはずだ。ちなみに蒼空は出席

日数こそ危うかったものの、成績は上条ほど悪くないため、補習は見事回避している。

「補習があるとかないとか、それどころじゃないんだって。早くこっちに来てくれ！」

何やら慌てた様子の上条。出席日数やらなんやらが危うい上条だが、理由もなく学校をサボるような人間ではない。多分、恐らく、きつと。少なくとも積極的にサボろうとは思っていないはずだ。そんな上条が今ここにいるということは、何かあったに違いない。

「……分かったよ」

とにかく、上条がここまで慌てているということは何かあったのだろう。不機嫌そうな声音ながらも、蒼空は上条に着いて行く。

「こつちだ！」

そのまま上条に着いていくとすぐ隣の部屋へと案内される。

「何だこの部屋、あつっ。しかも臭っ……！」

上条の部屋はめっちゃくちや暑かった。冷房も扇風機も働かせていないのだろうか。さらに臭い。何かが腐ったような臭いだ。思わず蒼空の目も覚める。

「……その辺の文句はビリビリに言ってくれ」

「ビリ娘に？　なんで？」

上条の部屋がクソほど暑いのは昨日の美琴とのいざこざで電気系統がイカれたのが原因だ。臭いのも冷蔵庫の機能が失われたことに

より、中の食材が……といった感じだ。隣の蒼空の部屋は何ともなかつたというのに、相変わらずの不幸さといったところだ。美琴は間接的に上条に勝つたと言っても過言ではないのではなからうか。

それはさておき、だ。部屋の中へと入るとそこには黒ではなく、白い修道服を着た少女が上条のベッドに座っていた。

年齢は14歳といったところだろうか。可愛らしい顔立ち、長い銀髪、そして緑色の瞳。一度見たら忘れられないような印象的な容姿である。

「……えーと、誰？ 妹さん？ あんまり似てないけど」

一瞬の沈黙の後、蒼空は上条にそう問いかける。どう見ても兄妹には見えないが。

「私はね、インデックスなんだよ」

蒼空の質問には上条が答える前に少女が答えた。

「インデックス？ グッ……！」

少女、インデックスの名前を呟いた時、蒼空の頭に頭痛が走った。

(そうだ、俺はその名前を知っている。また思い出した……)

「お、おい時雨、大丈夫か!？」

急にうずくまった蒼空に上条が声をかける。

「あ、ああ、大丈夫。それでインデックスさん？ 俺は時雨 蒼空って言うんだ。よろしく」

「インデックスで良いよ！ よろしくなんだよ！」

頭痛はスッとまるで嘘のように引いていった。そして改めて挨拶を交わす。

「さてと……」

インデックスと挨拶を交わし、蒼空はそう呟いて上条に顔を向ける。

「で、どういうことだ？ 名前がインデックスってことはまあ兄妹じゃないだろ。ハッ……!! お前まさか、誘か……」

「そんなわけないでしょうが!!」

確かにそんなことをする人間じゃあないのは蒼空も分かっている。

「じゃあなんだ？ 人に見られながらというアブノーマルなプレイするためか？」

「それも違う!! 断じて違う!! 実は……朝、ついさつき気づいたらベランダに引つかかかってたんだ」

……

沈黙が流れる。その間に蒼空は頭を整理する。

（ベランダに引つかかかってた？ コイツ何言ってるの？ だってここは7階だぞ？ 人が引つかかかってる訳が無い。確かにコイツは賢くはないが、決しておかしな頭をしているって訳じゃなかったのに……）

ちよつと考えてみてもそこにいる少女がベランダに引つかかかって

いたというのは信じられない。

「……じゃ、そういうことで」

とりあえずなんか面倒な事になりそうなので、蒼空は踵を返し、自身の部屋に戻ろうとする。そんな蒼空の服を上条が掴み、行かせまいとする。

「ほ、本当なんだって！ そりゃ俺だってまだ信じられないですよ!? でも本当なんだ!」

少女がベランダに気づいたら引つかかっていた。つくならつくにしてももつとマシな嘘をつけと言いたいところだが、どうやら本当らしい。嘘をついているようには思えない様子だ。

「それでとりあえずこういう事に縁がありそうな奴に声を掛けようと思っただ」

「俺に声を掛けようとした理由に関しては後でじっくりと聞かせて貰うが、残念ながら何も知らないね」

「そうか、じゃあ本人に聞くしかないか」

「つーか一番最初にそれをしろ」

「いやあ、ちよつとパニックになってて。それにいざという時にお前を巻き込んだいた方が良くと思って」

「よし、お前には今度スリル満天のパラシュート無しスカイダイビングをやってもらおう」

上条の顔が引き攣る。空から地面へと泣きながら落ちていく自身の姿と、それを見る蒼空が大爆笑している映像が脳内で再生されたからだ。

「……と、とにかく聞いてみよう。なあインデックス、なんでお前は我



が家のベランダに引つかかっていたんだ？」

蒼空と上条はインデックスへと視線を向ける。

「それはね……」

と、インデックスが言い掛けた時だった。ぐうぐうと、腹が鳴った。音の源はインデックスである。

「それよりもお腹が空いていたんだよ。ご飯を振舞ってくれると嬉しいな」

コテつ、と、蒼空と上条は古典的なりアクションを見せるのだった。

## 02話 魔術師は塔に降り立つ《2》

お腹が空いた、とのインデックスの発言により、蒼空達三人は隣にある蒼空の部屋へと移動した。というのも上条の部屋にある食べ物が全滅していたからである。さらにエアコンも機能が停止しており、かなり辛い環境だったので蒼空の部屋へと移動したのだ。

「ご馳走してくれてありがとうなんだよ。そらはいいい人なんだね」

蒼空が買い溜めていた冷凍食品の炒飯をペロリと平らげたインデックス。

「どういたしまして」

「でさー、何だってお前はベランダに干してあった訳？」

何故か自分も蒼空の部屋で朝ごはんを食べた上条は再びインデックスに問い掛ける。

「別に干してあった訳じゃないんだよ？」

「じゃあ何なんだよ？ 風に流されて引っかかってたんかお前」

「……似たようなものかも」

上条は冗談のつもりで言ったのだが、インデックスからは似たようなものと返ってきた。

「落ちたんだよ。ホントは屋上から屋上へ飛び移るつもりだったんだけど」

屋上？ と蒼空と上条は天井を見る。

この辺りは学生寮が建ち並ぶ一角だ。蒼空と上条が暮らすこの八階建ての寮と同じようなビルがずらっと並んでいて、ベランダから見れば分かる通りビルとビルの隙間は二メートルぐらいしかない。確かに、走り幅跳びの要領で屋上から屋上へと飛び移ることも出来るとは思う。しかしだ、

「八階だぜ？ 一歩間違えば地獄行きじゃねーか」

上条の言葉通り、誤って落下してしまった場合はタダでは済まないだろう。

「うん、自殺者にはお墓も立てられないもんね」

とインデックスは良く分からない事を言って、

「けど仕方なかったんだよ。あの時はああする他に逃げ道がなかったんだし」

「逃げ、道？」

不穏な言葉に蒼空も上条も思わず眉をひそめると、インデックスは子供のように「うん」と言って、

「追われてたからね」

一瞬、時が止まったかのように静かになった。

「ホントはちゃんと飛び移れるはずだったんだけど、飛んでる最中に背中を撃たれてね」

インデックスは笑っているみたいだった。

「ゴメンね。落っこちて途中で引つかかっちゃったみたい」

自嘲でも皮肉でもなく、ただ上条と蒼空に対して微笑みかけるために。

「撃たれたって……」

「うん？ ああ、傷なら心配ないよ。この服、一応『防御結界』の役割もあるからね」

『防御結界』って何だろう？ 防弾チョッキのことかな？ と、蒼空と上条が頭にハテナを浮かべていると、インデックスは新しい服を見せびらかすように立ち上がって回転してみせる。その様子は確かに怪我人には見えない。と言うか、ホントに『撃たれた』のだろうか？ 何もかも虚言妄想ウソっぱちの方が現実味があるように思う。

しかし、インデックスというこの少女が上条の部屋のベランダに引つかかっていたのは確かなのだ。蒼空からするとらしい、となるが。

もし、仮にだ。インデックスが言っていることが本当だとして、彼女は一体『誰に』撃たれたと言うのだろうか。

蒼空と上条の二人は考える。八階の屋上から屋上へと飛び移るその行為がどれだけ覚悟のいることなのかを。運良くベランダに引つかかっていたという事実を、行き倒れという言葉の裏を。

追われていたからね、そうやって微笑んで見せたインデックスの作る表情の意味を。

二人はインデックスの事情を知らないし、断片的な言葉の意味も良

く分からない。恐らく、インデックスが一から十まで説明したって半分も理解出来ないだろう。

けれど、たった一つ、七階のベランダに引つかかっていたという、一歩間違えばアスファルトに叩きつけられていたという現実だけは理解することが出来た。

上条は一度大きく深呼吸をする。

「……それで、一体ナニに追われているんだ？」

深呼吸と共に浮かんでいた疑問を飲み込んだところで、とりあえず一番気になるところを聞いてみる。

「うん……何だろうね？ 薔薇十字か黄金夜明か。その手の集団だとは思うんだけど、名前までは分からないかも。……連中、名前に意味を見出すような人達じゃないから」

「連中？」

今度は蒼空が神妙に聞く。連中ということは相手は集団で、組織だ。うん、と追われているインデックスは冷静に、

「魔術結社だよ」

.....

「まじゆつつて……、はあ、なんじゃそりゃあ!! ありえねえっ!!」

一瞬の間の後に、すぐ隣で響いた上条の叫びに蒼空は思わず耳を塞ぐ。

「は、え、アレ？ あ、あの、日本語がおかしかった、の？ 魔術だよ、

魔術結社」

当のインデックスは、上条の予想外の反応に戸惑っているようだ。

「英語で言われるとさらに意味が分からん。なに、なーに？ それって得体の知れない新興宗教が『教祖サマを信じない人には天罰が下るのでせう』とか言ってお薬飲ませて洗脳したりする危ない機関の事？

いやいろんな意味で危険なんだが」

「……そこはかたなく馬鹿にしてるね？」

「あー」

「……そこはかたなく馬鹿にしてるね？」

「——ゴメン、無理だ。魔術は無理だよ。俺も発火能力とか透視能力とか色々『異能の力』は知っているけど、魔術は無理だ」

「……？」

インデックスは小さく首を傾げた。

恐らく上条が科学万能主義の人間なら『世の中に不思議な事なんて何もないっ！』と否定されると思っていたんだろう。

だけど、上条の右手には『異能の力』が宿っている。

幻想殺しという、それが常識の外にある『異能の力』であるならば、たとえ神話に出てくる神様の奇跡でさえも一撃で打ち消す事の出来る力を。隣にいる、何故かこちらを恨めしそうな目で見てくる蒼空だっけそうさ。『異能の力』をその身に宿している。

「学園都市じゃ超能力なんて珍しくもねーんだ。人間の脳なんざ静脈にエスペリン打って首に電極貼り付けて、イヤホンでリズム刻めば誰だって回路開いて『開発』できちまう。一切合切が科学で説明できちまうんじや誰だっけ認めて当然だろ？」

「……よくわかんない」

「当然なの！ 当然なんだよ当然なんです三段活用！」

そう言った上条の頭をスパーンと蒼空がハリセンで叩く。

「な、何を……」

「さっきから耳元で大声出しすぎなんだよ。ちよつと落ち着け。ちなみにこのハリセンはギャグ的活用です」

どこからともなく取り出したハリセンを持って蒼空はそう言った。

### 03話 魔術師は塔に降り立つ 《3》

「ねえそら、君は私の言ってること信じてくれるよね？」

「ああ……いや、悪いけどインデックス、それに関しては俺もちよつと信じ難いな。個人的には都市伝説とかのオカルトちつくなものは好きなんだけどな」

「でも……魔術だって当然だもん」

インデックスはふてくされた様子を見せる。

「そうだな、例えばジャンケンってあるだろ。あ、ジャンケンは分かる？」

「知ってるよ」

「じゃあそのジャンケンを俺とインデックスが十回やってインデックスが十回連続で負けたとしよう。そこになんか理由があると思うか？」

「……………む」

「ないでしょ？　けど、そこに何かあるって考えちまうのが人間ってもんだ。」

インデックスだってこう思うんじゃないか？　自分がこんなに連続で負けるはずがないって。そこにはきつと何か見えない法則があるはずだって。

じゃあそんな風に思った人間の頭の中に例えば『星占い』を混ぜたらどうなる？」

「……………蟹座のあなたはついてないから勝負はやめておけ、とか？」  
「こそ。俺達の間じゃ、非現実の正体ってのはソレなんだ。運とかツキとか、見えない歯車を夢見る瞬間。ただの偶然のようなちつさい現実を、必然と勘違いする心。それが非現実さ」



インデックスはしばらくむすーつとしていたが、

「頭ごなしに否定するって訳でもないんだね」

次は上条が口を開く。

「ああ、だからこそ、真剣に考えているからこそ、カビ臭い昔話はダメなんだ。絵本に出てくるような魔術師なんて信じられない。MPを消費すれば死人が復活するなら誰も育脳なんかしやしねーしな。まったくもって『科学』と無関係な代物は、やっぱ信じらんねーよ」

超能力なんて代物が『不思議』に見えてしまうのは単に人間がソレを知らないだけで、ここでは超能力さえ『科学』で説明できてしまうというのが常識なのだ。

上条の言葉に蒼空も頷く。

「……………けど、魔術はあるもん」

むーつと口を尖らせながらインデックスは言う。おそらく、彼女にとって心を支える柱のようなモノなんだろう。蒼空と上条にとつての超能力と同じく。

「まあ良いけど。で、何でソイツらがお前を狙ってるって——」  
「魔術はあるもん」

上条の言葉を遮ってインデックスは言う。

「……………」

「魔術はあるもん！」

どうやら意地でも認めて欲しいみたいだ。ならばと、蒼空は問いかける。

「そこまで言うならインデックス、インデックスが魔術を使って見せてくれれば俺もカミヤんも信じられるかもしれないぞ」

「魔力がないから、私には使えないの」

「え？」

カメラがあるので気が散ってスプーンを曲げられません、というダメな能力者を見たような気がした。上条もなんじゃそりやという表情を見せる。

とはいえ、少しもやつとするような、複雑な気分であるのも事実だ。オカルトなんてない、魔術なんてありえないと言っておきながら、実は蒼空も上条も自身の能力のことをよく知らない。なぜ生まれつき、なぜ科学的な時間割りで後付けされたものではなく、生まれた時からその身に、その右手に宿っているのかを。

この世に『不思議なもの』なんてない、と言っておきながら自分達自身が常識を無視した非現実ではないか。

「……魔術はあるもん」

「……分かった。それじゃあ魔術があるでしょう。あるとして、インデックスが追われる理由は何なんだ？」

「……私は、禁書目録だから」

「はっ」

「私の持つてる、10万3000冊の魔道書。きっと、それが連中の狙いだと思う」

.....

再びの長い沈黙。

「……時雨さんや、上条さんはもう頭がパンクしそうなんですが」

インデックスには悪いが、蒼空も上条に全くの同感だ。

「えつと……その魔道書？　つていうのはつまり『本』つてことだよな？」

「うん。エイボンの書、ソロモンの小さな鍵、ネームレス、食人祭祀書、死者の書。代表的なのはこういうのだけど。死霊術書は有名すぎるから亜流、偽書が多くてアテにならないかも」

「いや、本の中身はどうでも良いんだ。どうせラクむぐつ！」

どうせラクガキ、と言いかけた上条の口を蒼空が塞ぐ。目で「これ以上インデックスを面倒臭くするな」と訴えながら。

「ほ、本の中身の事は俺達は分からないから置いて、その本はどこにあるんだ？」

10万冊といったら図書館一つ丸々レベルの数だ。しかし、どう見てもインデックスがそんな数の本を持っているようには思えない。というか一冊だつて持つていない。

「どっかの倉庫の鍵でも持つてるって意味なのか？」

上条が言う。確かにそれなら納得出来る。しかし、インデックスは「ううん」と首をふるふる横に振った。

「ちゃんと10万3000冊、一冊残らず持つてきてるよ？」  
「はっ。」

蒼空と上条の声が重なる。そして上条は眉をひそめて、

「バカには見えない本とか言うんじゃねーだろーな？」

「バカじゃなくても見えないよ。勝手に見られると意味がないもの」

インデックスの言葉は飄々としており、何故だか馬鹿にされた気分になる。

ひよつとしたら『誰かに追われている』というのも単なる妄想なんじゃないだろうかと上条は思う。ただの妄想で八階建ての屋上からジャンプして、一人で勝手に失敗してベランダに引つかかったとしたら。そんな人間とはもう付き合いきれない。上条と同じように、蒼空も流石にインデックスのことを疑う。

「……超能力は信じるのに、魔術を信じられないなんて変な話」

蒼空と上条の考えを察したのか、むすつと、口を尖らせてインデックスは言う。

「そんなに超能力って素晴らしいの？ ちょっと特別な力を持っているからって、人を小馬鹿にしているはずがないんだよ」

インデックスの言葉に蒼空と上条は顔を見合わせる。

「ま、そりゃそーだわな」

上条は小さくため息をつきながら言う。

「確かにインデックスの言う通り、超能力が使えるからって人の上に立てるって考え方は違う」

まあ、自分はその能力でこの学園都市の頂点に立っている訳だけど、と蒼空は少し自嘲気味に笑う。

「時雨も言ってる通り、こんな一発芸を持っていても人の上に立てるって考え方は間違ってる。けど、この街に住んでる人間にとっては能力を持つてる事が一個の心の支えになってから、そこら辺は大目に見て欲しいかな。ってか俺達も能力者の一人なんだけど」

「そうだよバカ、ふん。頭の中いじくり回さなくなっちゃってスプーンぐらい手で曲げられるもん。だいたいとうま達にだって何ができると言うのさ」

確かに、インデックスから見れば超能力だって蒼空達から見ると同じかもしれない。蒼空達が魔術を信じられないように、インデックスも超能力を信じられない。

「……えっと。何がって言うか、俺の能力はちよーっと説明しにくいと言うか」

上条はちよつと戸惑う。上条の幻想殺しについて誰かに説明することは滅多にない。『異能の力』に作用する以上、相手に異能や超能力について知っていて貰わないと説明にならない。

## 04話 魔術師は塔に降り立つ 《4》

「ほらやっぱり、超能力だのなんだの言って口だけなんだね」

勝ち誇ったように言うインデックス。そんなインデックスを見て上条の額に青筋が浮かぶ。

「こ、コイツ……俺の能力は右手で触れるとそれが異能の力なら、原爆級の火炎の塊だろうが戦略級の超電磁砲だろうが、神の奇跡だって打ち消せます！ はい！」

「えー？」

「なんだその胡散臭い通販を見ているような目は」

「だってー、神様の名前も知らない人にー、神様の奇跡だって打ち消せますとか言われてもー」

驚くべき事にインデックスは小指で耳の穴をほじって鼻で笑いやがったのだ。

「おお、確かに」

蒼空もインデックスの言葉に納得し、そう言いながらポンと手の平を叩く。

「確かにじゃない！ だいたいコイツだって魔法はあるけどアナタには見せられませんなんて言ってるインチキ魔法少女じゃねーか！」  
「だから魔術はインチキじゃないもん！」

「だったら見せてみるや！ ソイツを俺の右手でぶち抜きやお前の魔術も俺の幻想殺しも証明できて万々歳だろ！」

「いいもん、見せる！」

互いにヒートアップしている上条とインデックス。ついにインデックスはむきーっ！ という感じで両手を振り上げて、

「これっ！ この服！ これは『歩く教会』っていう極上の防御結界なんだからっ！」

インデックスは両手を広げて自分が着ている白い修道服を強調してみせる。

「防御結界か、さっきも言ってたな」

蒼空が呟く。やっぱり意味はさっぱり分からないが。

「そんなことはどうでも良いんだ。なんだよ『歩く教会』、防御結界って！ 説明するなら専門用語を使うんじゃないよ」と噛み砕いてしやがれ！ それの説明つてもんなんだよこの不親切野郎！」

「なっ……ちつとも理解しようと思わない人が言う台詞!? だったら論より証拠！ ほら、台所にある包丁で私のお腹を刺してみる!？」

「うん、じゃあ刺してみる！ ……ってなるか！」

「あ、信じてないね。これは『教会』として必要最低限の要素を詰め込んだ……」

インデックスはつらつらと『歩く教会』について語る。

「私は背中を撃たれてベランダに引っかかっていたけど、この『歩く教会』がなかったら風穴が空いてたところだったんだよ。そこんとこ分かっている?」

うるせーばか。上条は口には出さずとも呟いた。

「分かったよ、全然分からんけど分かったよ。要するにそれが『異能の





ふっふーん、という感じで両手を腰に当てて小さな胸を大きく張るインデックスだったが、次の瞬間、プレゼントのリボンをほどくようにインデックスの衣服がストーンと落ちた。

修道服の布地を縫っている糸という糸が綺麗に解けて、本当にただの布地に逆戻りしている。

一枚布の、帽子のようなフードだけは服から独立していたせいか無事で、頭の部分にそれだけ載っかっていると逆に切ない気持ちになる。

ふっふーん、という感じで両手を腰に当てて小さな胸を大きく張ったまま凍りつく少女。

詰まる所、インデックスは完全無欠に素っ裸だった。



インデックスは怒ると人に噛み付く癖があるらしい。蒼空はその危険を察しての行動が功を奏し、その被害に会うことはなかったが。

「痛ったー……。あちこち噛み付きやがって、合宿ん時の蚊かお前は？」

「……」

返事はない。

修道服は蒼空の能力で修復したが、インデックスは着替える間もなく毛布にくるまって蹲っており、重たい空気が部屋を支配していた。

「……あの」

へびみたいな目で睨まれた。視線で蒼空に助けを求めてみるが蒼空は座ったままで狸寝入りを決め込んでいる。

「……あの」

「……なに？」

「今のは100%俺が悪かったんでせう？」

返事の代わりに目覚まし時計が飛んできた。蒼空の部屋のものなどはお構い無しだ。ひい！ と上条が絶叫すると同時に、続いて枕、そしてこの部屋には存在しないはずのものまで飛んでくる。

「で、でも服自体は時雨が元に戻してくれた訳ですし……」

上条はお供え物のようにインデックスの傍に蒼空が直した修道服を置く。

「そういう問題じゃないんだよ。あれだけのことがあったっていうのに、どうして普通に話しかけられるんだよ!？」

「あーいえ！ 大変ドギマギしておりますというか青春ですなとかか！」

「バカにして……うううううう!!」

「分かつ……謝る、謝るから！ ここ一応時雨の部屋だから、俺の部屋の物だったら我慢しなくてもないけど、人のもんなんだからハンカチみたいに噛むな馬鹿！」

ははーっ、とギャグみたいに両手をついて土下座モードの上条当麻。

というか、史上初の女の子の裸に内心、上条は心臓を握り潰されるかと思っていた。顔には出さないオトナな上条当麻である。

……と、思っているのは本人だけで、傍から見ればエライ事になっている。幸いインデックスはベッドの隅で蹲っているし、それに気づいたのは傍から見ている蒼空だけだが。

未だに重たい空気が部屋に漂う中、インデックスは修復された修道服を手に取り着替え始める。

「……………何で見てるのかな？　せめてあっち向いて欲しいかも」

「あんだよ別に良いじゃんよ。着替えなんてエロくねーだろ」

蒼空とインデックスは同時にコイツマジか、というジト目を上条に送る。そんな視線を受けても上条はまるで気づいていないようなのでインデックスは諦めてもそもそと毛布の中で着替え始める。その間も蒼空は上条にジト目を向けていた。

何となく、会話がないエレベーターのような気まずい雰囲気がある。そんな中で上条の頭の中に『夏休みの補習』という言葉が浮かんで来た。

「うわっ！　そーだ補習だ補習！」

携帯電話の時計を確認する。

「えっと、俺これから学校行かなきゃなんないんだけど、お前どーすんの？」

既に叩き出すという選択肢は上条の中から消えていた。まあ……ここは蒼空の部屋な訳だが。蒼空だって頼めば放ってはおかないだろうし、隣の自分の部屋を貸しても良い。

インデックスの修道服『歩く教会』とやらが幻想殺しに反応した以

上、やはり彼女も『異能の力』に関わっている事は間違いない。そうなるインデックスが言っていたことも100%ウソではないという事になる。

例えば、魔術師達に追われてビルの屋上から落ちた事とか。

例えば、インデックスはこれからも命懸けの鬼ごっこを続ける事とか。

そういう事を抜きにしても、あんなずーんとしたインデックスはそっとしておきたい、という感情もある訳だが。

「とにかくあとは時雨、頼んで良いか？」

「あいよ」

蒼空が手をフリフリしながらそう言うと、上条は勢い良く部屋を飛び出した……ところでドア枠に高速で小指が直撃した。

「ばっ、みゃー！ みゃああ!!」

片足を抑えて奇声を上げる上条。あまりの激痛に大暴れしようとした上条のポケットからスルリと携帯電話が滑り落ちた。あっ、と気づいた時には固い床に激突した液晶画面がビキリと致命傷な音をたてる。

「う、ううううう！ ふ、不幸だ」

いつも通りの鮮やかな一連の流れに蒼空が関心していると、「不幸というより、ドジなだけかも」とちよつとだけインデックスが笑った。

「けど、幻想殺しっていうのがホントにあるなら、仕方がないかもしれないね」

「…………どういふことでしょう?」

上条が涙目になりながら聞く。蒼空も首を傾げた。

「うん、こういう魔術の世界のお話なんて君は信じないかもしれないけど、神様のご加護とか、運命の赤い糸とか。そういうものがあつたとしたら、君の右手はそういうものもまとめて消してしまっているんだと思うよ?」

「待てよ。幸運だの不幸だのって言葉は、確率と統計のお話だぜ? んなのある訳……、ッ!」

言った瞬間、ドアノブに触れていた上条の指に壮絶な静電気が襲いかかった。な!?! と反射的に体がビクンと震えると、筋肉が変な風に動いたのかいきなり右足のふくらはぎがつった。くっッ!! と、悶絶することおおよそ600秒。もはや芸術的とさえ思えるほどの流れるような不幸。

「……………あの、しすたーさん?」

「なに?」

「……………ごせつめいを」

「ご説明っていうか、君の右手の話が本物ならね、その右手があるだけで『幸運』ってチカラもどんどん消していつてるんだと思うよ?」

「……………つまり、あれですか?」

「君の『右手』が空気に触れてるだけで、バンバン不幸になっていくつて訳だね」

「ぎゃああああああああ!! ふ、不幸だああああああ!!」

オカルトをまるで信じない上条だが、こと自身の『不幸』に関してのみは別腹だった。とにかく大宇宙の悪意のようなものを感じてしまうほど上条は思った事が上手くいかない人間なのだ。

「何が不幸って、君。そんな力を持って生まれてきちゃった事がもう不幸だよね」

にっこりと笑顔のシスターに思わず上条は涙した。

## 05話 魔術師は塔に降り立つ 《5》

インデックスに自身の右手の不幸を伝えられた上条は、絶叫した後にとぼとぼと学校へ向かった。

「で、インデックス、結局これからどうするつもりなんだ？」

上条にも頼まれたことだし、蒼空としてもインデックスを無下に扱うつもりは無い。

インデックスの着ている『歩く教会』とやらの修道服が上条の幻想殺しによつて破られたという事は、インデックスも異能の力に関わりのある人間という事だ。

つまりインデックスが魔術師に追われていた。というのも蒼空はウソではないと思っている。というかそもそも蒼空は上条ほどインデックスの話を疑つてはいなかった。

まあ魔術や魔術師云々は置いておくとして、インデックスが嘘をついているような様子がなかった。なら何者かに襲われている少女を放つておこうとは思えない。

あの上条ほど正義感に溢れているつもりはないが、このままインデックスを見捨てるほど冷たくはないつもりだ。

「……出て行くよ」

「別に遠慮しなくてもいいんだぞ？」

「ううん、ここにいと『敵』が来ちゃうから」

そう言うインデックスは立ち上がり、玄関まで向かう。

「だったら、なおさら外を出歩くよりも部屋の中にいた方が良いだろ」

「そうでもないんだよ」

「居場所を見つけるような魔術でも使ってくるのか？」

蒼空が冗談交じりにそう言うと、インデックスは自身の修道服を摘みながら「その通り」と返してきた。

「この服、『歩く教会』は魔力で動いてるからね。簡単に言っちゃえば、敵はこの『歩く教会』の魔力を元に探知をかけてるみたいなんだよね」  
「……何でそんな服着てんのさ」

そんなものわざわざ自分から追ってきてくださいと言っているよ  
うなものだ。

「それでもこれの防御力は法王級だからなんだよ？　これはトリノ聖骸布——神殺しの槍に貫かれた聖人を包み込んだ布地を正確にコピーしたモノだから、強度は絶対なんだよ。君達で言うなら核シェルターって感じかな。物理・魔術を問わず全ての攻撃を受け流し、吸収しちゃうんだから」

「ああ、さっきも言ってたな。それがなかったら風穴が空いてたって」  
「そうなんだよ」

そう言うインデックスはどこか自慢げだ。インデックスの説明を聞いても蒼空はよく分からなかったがまあ凄いモノなんだろう。しかし……

「その防御、さっき破られてなかった？」

ビシイとインデックスが固まった。

「……………」

「アイツの右手に」

そう言うと、インデックスは涙目になる。



「あ、いや、でも元に戻したし。ほら、壊れたからその発信機能的機能もなくなってるんじゃないか？」

「それでも『歩く教会が壊れた』って情報は伝わっちゃうよ。さつきも言ったけど、『歩く教会』の防御力は法王級なの、簡単に言えば『要塞』みたいだね。……私が敵なら、理由はどうあれ『要塞』が壊れたと分かれば迷わず打って出ると思う」

「ちよつと待った。だったら尚更ここにいた方が良いだろ。魔術とかは一旦置いとくとして、追われてる奴を放つとくのは……それに、アイツだっていざって時には頼りになる奴だぞ。普段はアレだけど」

インデックスはきよとんとする。本当に、本当に。その顔だけ見ているとただの女の子にしか見えなくて、

「……じゃあ。私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

につこり笑顔だった。

「……あ、え」

しかしそれはあまりに辛そうな笑顔で、蒼空は言葉の全てを失った。インデックスは優しい言葉を使って暗にこう言っていた。

こつちにくんな。

「大丈夫だよ、私も一人じゃないもの。とりあえず教会まで逃げ切れば匿ってもらえるから」

「その教会ってのはどこに？」

「ロンドン」

「遠すぎ！ 何キロ逃げるんだよ！」

告げられた海の向こうのその目的地に蒼空は思わずツッコむ。

「うん？ 大丈夫だよ。日本にもいくつか支部があると思うし」

「……そりゃそうか。学園都市にもあるにはあるな」

蒼空自身、長いことこの学園都市で暮らしているが利用したことは一度もない。そもそも日本自体、十字教という文化に乏しい。蒼空が見た事のある教会なんて、プレハブ小屋のてっぺんに十字架が載っかってあるものぐらいだ。逆に豪勢で煌びやかな教会というのはそれはそれでどうかと思うが。

「うーん。けど単純に教会ってだけでもダメなんだよ。私の所属するのは英国式だから」

「教会にも色々種類があるのか？」

「うん。単純に十字教といっても色々あるの。まずは旧教と新教。さらに私の属する旧教でも、バチカンを中心とするローマ正教、ロシアに本拠地を置くロシア成教、そして聖ジョージ大聖堂を核とするイギリス清教って感じで色々あるの」

「ほー、じゃあ他の教会に行ったらどうなるんだ？」

「門前払い」

インデックスは苦笑しながら言った。

「ロシア成教やイギリス清教はそれぞれの『国の中』にしかないからね。日本でイギリス清教の教会ってのは珍しいんだよ」

なかなか雲行きが怪しそうな話だった。ひよつとして、インデックスは空腹で行き倒れる前に、何度も『教会』を訪れたんじゃないだろうか？ その度に門前払いを食らった彼女はどんな気持ちで逃げ続けていたんだろう？

「大丈夫。英国式の教会を見つけるまでの勝負だから」  
「……」

蒼空は一瞬だけ、自分の力のことを考える。

「……なんか困ったことがあったら俺の部屋でも隣のカミヤんの部屋でも、また来て良いから。……ベランダに引っかかるんじゃないかって、ちゃんと玄関から」

そんな事しか言えなかった。この学園都市の頂点に立つ力を持っているのに。一人で一軍団と戦えると言われていくくせに。

「うん。おなかへったらまたくる」

ひまわりみたいな笑顔で、それは完璧な笑顔だったからこそ、また蒼空は何も言えなかった。

「おう、今度は冷凍食品なんかじゃなくてもっと良いもん食べさせてやるよ」

そして部屋を出るインデックス。そんなインデックスを避けるように、清掃ロボットが通りすぎていく。

「ひゃい!？」

完璧な笑顔が一瞬でぶっ飛んだ。まるで足がつつたみたいにビクンと震えたインデックスは、そのまんま後ろへコケた。がつん、とヤバめの音と共に頭の後ろが壁に激突する。

「~~~~ツ! な、なんか変なのがさりげなく登場してる……ツ!？」

インデックスは思わず涙目だったが、頭を抑えるのも忘れて絶叫していた。

「……あれはただの掃除ロボットだぞ」

何となくシリアスだった雰囲気が一気に弛緩し、蒼空はため息を吐いた。

大きさ、カタチはドラム缶だと思えば良い。底には小さなタイヤを装備し、業務用の掃除機みたいな円形の回転するモップがぐるぐる回っている。人間と障害物を避けるためにカメラがついているせいでミニスカ女子にメチャクチャ嫌われている一品である。

「……そっか。日本は技術大国って聞いてたけど、使い魔も機械化されている時代なんだね」

「アレはそんなんじゃない」

インデックスは妙な角度から感心していた。

「ここは学園都市だからな。こんなもん街中どこにでもある」

「がくえんとし?」

「え、お前知らなかったの? ……学園都市ってのは東京の西地区の開発が遅れてる辺りを一気に買い取って作った『街』だ。何十もの大学に何百もの小中高校がひしめき合ってる『学校の街』だ。だから学園都市」

そう言つて蒼空は扉の外に視線を向ける。

「この街に暮らしてる人間のほとんどが学生。そこら辺に見えるマンションみたいなのは全部学生寮だよ。ここもな」

勉強のみならず、能力や肉体までも開発する『裏の顔』もある訳だが。

「街の様子が外と大分違うのもそれだから。生ゴミの自動処理とか実用レベルの風力発電とか、さっきの掃除ロボとか、あーいう大学の実験品とかがそのまま街に溢れてんのさ。おかげで20年ぐらい文明レベルが先に進んでるって訳だ」

「ふうん」

インデックスは掃除ロボットをじーっと眺めて、

「じゃあ、この街の建物はみんな『がくえんとし』の傘下って事になるのかな？」

「ま……そんな感じだな。だからイギリス教会の傘下を探すなら学園都市は出た方が良さと思うぞ。多分、この街の教会は神学とかの教育施設だろ」

ふうん、とインデックスは頷いて、ようやく壁にぶつけた頭の後ろを手で抑えた。

「あ、あれ!?! 頭のフードがなくなってる!?!」

「今更かい。さっき落としてたぞ」

「ひゃい?」

蒼空は『毛布の中で着替えている時に落っことした』と言ってるともりだったが、インデックスは『清掃ロボットにびっくりして後ろへコケた時に落とした』と勘違いしたようだ。あちこち通路の床を見ながらしばらく頭に「?」を浮かべていたが、

「あつ、そうか! ああの電動使い魔!」

何か勘違いしたまま通路の角へ消えた清掃ロボットをダッシュで  
追い掛けて行ってしまった。

「アイツ、追われてんだよな……」

通路の先を見ると既にインデックスの姿はなかった。結構シリア  
スなお話をしていたはずなのに、別れも涙もあったもんじゃない。

なんというか、あの姿を見るとインデックスは世界が滅んでもなん  
だかんだで生き残りそうだな、などと何の根拠もなく思った。

「あ、この帽子どうしよ」

## 06話 魔術師は塔に降り立つ《6》

インデックスが去った後の部屋はいつもより静かに感じた。よく分からないというか、不思議な少女だったが、上条とインデックスのやり取りは見ていて面白かった。

「なーんだかなあ……」

ベッドに寝転がり、何も無い天井を眺めながら蒼空はつぶやく。ちなみにインデックスがくるまっていた毛布は洗濯行きにしている。上条にあげても良かったが。

インデックスという少女が走り去ってから妙に落ち着かない。静かになったというのもそうだが、胸騒ぎとでも言うべきか。そんな感覚が蒼空の中に満ちていた。

ちらつと机の上に置かれたインデックスのフードに視線を移す。

「魔術に魔術師……」

他にも魔術結社やら魔道書やら。インデックスが口にしてきた言葉だ。

どこもかしこも最先端の科学技術で溢れているこの学園都市で何を世迷言を、とも思ったがインデックスに嘘をついているような様子はなかった。時々、気圧されるような妙な迫力もあったし、何より実際に上条の右手がインデックスの修道服に反応した。『幻想殺し』それが反応したということは少なくともインデックスは『異能の力』に関わりのある人間という事になる。

「あの時、あの服を直した時の違和感……」

蒼空の能力は『ブラックホール時空終点』。空間と時間に干渉し、操作する能力である。その強度はレベル5。

蒼空は学園都市230万人のその頂点に立つ8人の内の一人だ。インデックスの修道服はこの能力で修道服の時間を巻き戻すことで修復した。

その時、修道服の時間を巻き戻した時に違和感を感じた。形だけは直ったが元には戻っていない。形だけの修復、ハリボテとでも言うべきだろう。あの修道服には蒼空の理解の及ばない力があつた。

「魔術、か」

恐らくあの修道服には蒼空にとって理解の及ばない力……『魔術』とやらが仕掛けられていたのだろう。インデックスがつつらと語っていたではないか。聖骸布やら神殺しの槍だとか。蒼空自身が得体の知れない力には蒼空の力が作用しなかつたという事だ。

「しゃーねえ、アイツにも頼まれたことだし、帽子も返さないことだしな」

蒼空は起き上がり、机に置いておいたインデックスのフードを手にとった。



「……やっぱり見つからないか」

最終下校時刻になるまで探してはみたが、結局インデックスを見つけることはできなかった。

昼ぐらいにはもしかしたらインデックスが戻って来ているかもと、



一度寮の方にも帰ってみたが、それも空振り。

「ポジティブに考えると、もう無事にお仲間の所へたどり着いた。ネガティブに……あ」

ふとなんか騒がしいのがあるなど視線を向けると、そこには蒼空のよく知る人物がいた。

ツンツン頭の上条さんと、ビリビリこと御坂美琴だ。

蒼空は上条の元へと能力を使い移動する。

「君達、痴話喧嘩はやめてさっさと下校しなさい。もう最終下校時刻ですよ」

「痴話喧嘩じゃない!!」

と、息ピッタリで返ってきた。

「って、時雨か。なんだってこんなところに?」

「誰かさんがひん剥いたシスターさんを探してたんだよ」

「ひん剥いた……?」

上条の脳裏に今朝の光景が浮かぶ。

「あ! っつ、いえ! アレは不幸な事故といいますが、お互いの行き違いといえますか……」

「誰に言い訳してんだ。ま、ひん剥いたは冗談だけど、インデックスを探してたのは本当」

「インデックスを? 探してた?」

「その辺は帰りながら、カミヤんも今帰りだろ?」

「ああ。そうだ、聞いてくれよ……」

蒼空と上条が帰宅しようと歩き始める。

「ちよつと……待ちなさいよーっ!!」

青い電流が迸った。瞬間、辺りを歩いていた人達の携帯電話が一斉にバギンと凄まじい音を立てた。流れていた有線放送が途切れ、そこらを走っていた警備ロボットまでもバギンと嫌な音を鳴らす。

「ようやくこつちを向いたわね。自然に無視してんじやないわよ。――むぐっ!」

上条は美琴の口を慌てて塞ぐ。

何故そんなことをしたかは周りを見れば一目瞭然。ケータイを焼かれた人間がみんな殺気立っている。

このまま風紀委員でも警備隊にでも通報されたらきつとあの人達がやりましたとひとまとめに犯人にされ、みんな弁償だ。そんなのたまったもんじやない。

上条の必死の思いが届いたのか、美琴もこれ以上何もすることなく、周りの人達も誰も3人に詰め寄ってくることはなかった。

良かったあ、と上条はホツとため息をつく、と。

『――メッセージ、メッセージ。エラーNo. 100231―Y F。電波法に抵触する攻撃性電磁波を感知。システムの異常を確認。電子テロの可能性に備え、電子機器の使用を控えてください』

3人は恐る恐る振り返る。ぷすぷすと。煙を噴いて歩道に転がるドラム缶がよく分からない独り言を呟いて、次の瞬間、警備ロボットは甲高い警報を辺り一面に響かせた。

当然、逃げるに決まっていた。



「エセ魔法少女シスターから始まり、居残り補習の次にビリビリ……はあ、今日も不幸だ……」

美琴から逃れ、ようやく帰路についた蒼空と上条。蒼空はインデックスを探し歩いて、上条は一日中の補習、そして美琴、2人ともぐつたりとして歩いていた。

「そうだ、そういや結局時雨は何してたんだ？ インデックスを探してたって言ってたけど」

「え？ ああ、カミヤんが補習に行った後、インデックスも出て行ったんだ」

「アイツ、行く宛てなんかあったのか？」

「ん……教会に行くんだと」

「教会、まあシスターだったし。でもなんで探してたんだ？」

「これ」

ヒラヒラと蒼空は手に持っていたインデックスのフードを見せる。

「それはアイツの」

「ああ、忘れ物を届けようと思って。あとは……何となく胸騒ぎがしたから、かな」

「……」

蒼空の言葉に上条も口をつぐんだ。上条も確かにインデックスの事が気になっていた。まあ見た目も言動も全部まとめてツツコミ所の塊みたいな少女、気にならない訳がない。

「アイツ、インデックスが言ってたんだ。『私と地獄の底までついてきてくれる?』って」

なんじゃそりや。と普段の上条なら返していた事だろう。しかし、不思議とその光景が簡単に想像できてしまった。

そのまま蒼空と上条はなんとなく、言葉は交わさずに歩いた。

いつの間にか2人は学生寮の前まで戻ってきていた。人の気配はない。恐らく夏休み初日だから、みんな街に出て遊び呆けているんだろう。

蒼空と上条が暮らす寮は、見た目は典型的なルームマンションだ。四角いビルの壁一面に直線通路とズラリと並ぶドアが見える。鉄格子のような金属の手すりに『ミニスカ覗き防止用』のプラ板が張っていないのは、ここが『男子寮』だからだろう。

学生寮の建物は縦に——奥へ延びるように作られていて、玄関や反対側のベランダは、道路から見て側面——つまりビルの隙間にある。

入口は一応オートロックになっているが、両隣のビルとの間隔はそれぞれ二メートル。今朝、インデックスがやったようにビルからビルへ飛び移れば簡単に侵入できる。

蒼空と上条はオートロックを抜けて、管理人室と呼ばれる物置の横をすり抜けてエレベーターに乗る。工場の搬入用のエレベーターより狭くて汚いのはご愛嬌、屋上を示す『R』のボタンが小さな鉄板で封印されているのは夜な夜なビルの屋上を飛んでやってくるロミオとジュリエット対策だ。

電子レンジみたいな音と共にエレベーターは七階に止まる。がこがこ音を立てて開くドアを押しつけるように上条は通路に出た。

「ん？」

と、上条が気づく。直線的な通路の向こう。——自分の部屋のドアの前で、三台の清掃ロボットがたむろしている。三台、というのは珍しい。そもそもこの寮に配備されている清掃ロボットは全部で五台のはずなのに。それぞれ体を小刻みに前後させている所を見ると、よっぽど酷い汚れを掃除しているようにも見える。

「カミヤんの部屋の前つてめっちゃ汚いんだ」

「失礼な！」

……何となく、とてつもなく不幸な予感がした。

大体、床に貼り付いたガムだつて素通りで剥がすほどの破壊力を持つドラム缶ロボだ。一体何をどうしたらそんな三台もの清掃ロボットが苦戦しなければならぬのか。もしかして童貞を捨てるために無理して不良ぶってる隣人、土御門元春が酔っ払って人ん家のドアを電柱代わりに、盛大にゲロをぶちまけたんじやあるまいかと上条は戦慄する。

「一体何が……」

人間には怖いモノ見たさという常軌を逸した機能が備わっている。

一歩、二歩と思わず足が進んだ時、ようやくそれが見えた。

不思議少女インデックスが空腹でぶっ倒れていた。

「……………あー」

蒼空も上条の後ろから顔を横に覗かせる。

ロボットの陰に隠れて全体は見えないが、うつ伏せに倒れた銀髪に白い修道服は誰がどう見ても行き倒れていた。

三台ものドラム缶にがつつんがつつん体当たりをぶちかまされても、インデックスはピクリとも動かない。何だか都会カラスに小突かれているようで異常に哀れに見えた。大体、清掃ロボットは人間や障害物を避けて通るように作られているはずなのだが、機械にさえ人間扱いしてもらえないというのは一体どういう事なんだろう？

「……………なんていうか、不幸だ」

とか何とか言いながら、上条当麻は鏡を見れば自分の顔に驚いていただろう。彼の顔は誰がどう見ても笑っていた。蒼空もはや聞きなれた上条の台詞に、小さく笑った。

二人とも、やはり心のどこかに引つかかっていた。『魔術師』という言葉は信じられなくても、怪しげな新興宗教の連中が一人の女の子を追い掛け回している、と解釈する事もできる。

それが何でもない、いつもの姿(?)で現れたことが嬉しかった。そんな理屈を取っ払っても、もう一度再会できた事が何故だか何となく、嬉しかった。

「おいー…こんな所でナニやってんだよ？」

上条は声をかけて、走る。蒼空はそんな上条の後をいつも通りの歩幅で追いながら、手に持った白いフードを見る。

渡し損ねた純白のフード。胸騒ぎの種だったそれが、今は再会の約束のおまじないのように思えてくるのが不思議だ。

「……、あ……？」

上条は気づく。インデックスが血だまりの中に沈んでいる事に、ようやく。

「……は？」

蒼空も気づく。

最初に感じたのは、むしろ驚きよりも戸惑いだった。

たむろする清掃ロボットの陰になっていた見えなかった。うつ伏せに倒れるインデックスの背中——ほとんど腰に近い辺りが、真横に一閃されている。まるで定規とカッターナイフを使つて段ボールへ一直線に切り込みを入れたような刃物の傷。腰まである長い銀髪の毛先は綺麗に切り揃えられ、その銀髪も傷口から溢れ出す赤色に染め上げられていく。

二人は一瞬、それを『人間の血液』と認識する事ができなかった。

一瞬前と一瞬後。あまりのギャップのありすぎる現実が、思考を混乱させた。真っ赤な真っ赤な……ケチャップ？ 空腹でぶっ倒れる直前のインデックスが最後の力を振り絞ってケチャップでも吸っていたのかと、そんな微笑ましい絵を想像して笑おうとする。

笑おうとしたけど、笑えない。

そんな事、できるはずがない。

三台の清掃ロボットがぎこぎこ音を立てて小刻みに前後する。床の汚れを掃除している。床に広がる赤色を、インデックスの体から溢れる赤色を。薄汚れた雑巾で傷口をほじくり返すように、インデックスの体の中身を残らず吸い出すように。

「や、……めろ。やめろっ！ くそ!!」

ようやく上条の目が現実にピントを合わせた。重傷のインデックスに群がる清掃ロボットに慌てて掴みかかる。盗難防止のために無駄に重たい清掃ロボットは馬力もあって、なかなか引き剥がす事ができない。

もちろん、清掃ロボットは『床に広がり続ける汚れ』を掃除しているのであって、直接インデックスの傷口には触れていない。それでも上条には清掃ロボットが腐りかけた傷口に群がる羽虫のように見えた。

「くそっ！ おい！ 時雨!!」

上条の声で蒼空は呆然としていた意識を取り戻す。上条が必死に引き剥がそうとしていた清掃ロボットを能力で転移させ、インデックスから引き剥がす。

「何だよ、一体何なんだよこれは!? ふぎけやがって、一体どこのどいつにやられたんだ、お前!!」

「うん？ 僕達『魔術師』だけど？」



## 07話 魔術師は塔に降り立つ《7》

背後からかかった声は、インデックスのものではない。

殴りかかるように蒼空と上条は体ごと振り返る。エレベーター……ではない。その横にある非常階段から、男はやってきたようだった。

白人の男は二メートル近い長身だったが、顔は蒼空よりも上条よりも幼そうに見えた。

歳は……おそらくインデックスと同じ十四、五だろう。その高い身長は外国人特有のものだ。服装は……教会の神父が着ているような、漆黒の修道服。ただしコイツを『神父さん』と呼ぶ人間は世界中を探しても一人として存在しないだろう。

相手が風上に立っているせいか、十五メートル以上離れていても甘ったるい香水の匂いを感じ取れる。肩まである金髪は夕焼けを思わせる赤色に染め上げられ、左右10本の指には銀の指輪がメリケンのようにギラリと並び、耳には毒々しいピアス、ポケットから携帯電話のストラップが覗き、口の端では火のついた煙草が揺れて、極めつけには右目のまぶたの下にバーコードの形をした刺青が刻み込んでいる。

神父と呼ぶにも、不良と呼ぶにも奇妙な男。

通路に立つ男を中心とした、辺り一帯の空気は明らかに『異常』だった。まるで今まで自分が使ってきた常識が全部通用しないような、まったくもって別のルールが支配しているような———そんな妙な感覚が氷の触手のように辺り一帯に広がっている。

蒼空と上条が感じたのは『恐怖』でもなければ『怒り』でもない。『戸惑い』と『不安』。まるで言葉も分からない異国でサイフを盗まれたような、絶望的な孤独感。じりじりと、体の中へ広がる氷の触手のような感覚に心臓は凍り、思い至る。

これが、魔術師。

ここは、魔術師という違うモノが存在してしまう、一つの『異世界』と化していた。

一目で分かる。

魔術師なんて言葉は今でも信じられない。信じられないけれど、これは、間違いなく自分の住んでいる常識の『外』の住人だという事が。

「うん？ うんうんうん、これはまた随分と派手にやっちゃって」

口の端の煙草を揺らしながら魔術師はあちこち見回す。

「神裂が斬ったって話は聞いてたけど……、まあ。血の跡がついてないから安心安心とは思ってたんだけどねえ」

魔術師は蒼空が後ろに飛ばした清掃ロボットを見る。

おそらくインデックスはどこか別の場所で『斬られて』、ここまで命からがら逃げてきた所で力尽きた。途中、辺りにべったりと鮮血をなすりつけただろうが、それらは全て清掃ロボットが綺麗に拭い去ってしまったのだ。

「けど、何で……」

「うん？ ここまで戻ってきた理由かな。さあね、忘れ物でもしたん

じゃないのかな。そういえば昨日背中を撃った時点では被り物があつたけど、あれつてどこで落としたりたんだろうね？」

目の前の魔術師は『戻ってきた』と言った。

二人は気づく。そしてインデックスの忘れ物、蒼空は自分の手に持つ白いフードを強く握りしめる。

つまり、今日一日のインデックスの行動を追尾していた。そして修道服『歩く教会』の一部を忘れている事も掴んでいる。

となると、この魔術師達はインデックスの『歩く教会』が持つ『異能の力』を感知して追い掛けているのだ。『歩く教会』が破壊された事を知っているのも、『信号』が途切れた事を知っていたから——これも確かインデックスから聞いた。

けど、それはインデックスも分かっていたはずだ。分かっているながら、それでも『歩く教会』の防御力に頼ってきたらしいんだから。

けど、それなら彼女は一体何のためにここまで戻ってきた？ 破壊されて使えもしない『歩く教会』の一部をどうして回収する必要がある？ 上条の右手のせいでもう『歩く教会』全体が使い物にならなくなったのなら、その一部を回収したって何の意味もないというのに……

『……、じゃあ。私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？』

全てが繋がった。

手に握るフード。これには上条の右手は触れていない。つまりこれには魔力が残っている。それを探知して魔術師がやってきてしまいかもしれないと、彼女は考えた。

だから、インデックスはわざわざ危険を冒して『戻ってきた』。

「……、ばっかやろう」

上条がこぼす。蒼空も奥歯をぎりつと食いしぼる。

そんな事する必要はないのに。『歩く教会』を壊したのは上条の不手際だし、忘れ物のフードだつて蒼空は届けようとすれば届けられた。そして何より——インデックスは、自分達の人生を守り抜く義理も権利だつてありはしないはずなのに。

それでも、彼女は引き返さなければ気が済まなかった。

赤の他人の、出会つて三十分も経っていない上条の事を、蒼空の事を。

命を賭けて、魔術師達との戦いに巻き込ませないために。

戻つてこなければ、気が済まなかった。

「——ばっかやろうが!!」

ピクリとも動かないインデックスの背中が、妙に癩に障った。

前に、上条の『不幸』はこの右手のせいらしい、という話をインデックスから聞いた。

何でも『神様のご加護』とか『運命の赤い糸』とか、そういう微弱的な『異能の力』さえ、右手は無意識の内に打ち消してしまっているらしい。

そして、上条が不用意に右手で彼女に触れていなければ、修道服『歩く教会』を壊していなければ、少なくとも彼女が戻ってくる事はな

かった。

蒼空がさつきと忘れ物を返していれば、少なくとも彼女が戻ってくる事はなかった。

「うん？ うんうんうん？ 嫌だな、そんな目で見られても困るんだけどね」

魔術師は口元の煙草を揺らし、

「ソレを斬ったのは僕じゃないし、神裂だって何も血まみれにするつもりなどなかったんじゃないかな。『歩く教会』は絶対防衛として知られるからね。本来ならあれぐらいじゃ傷もつかないはずだったのさ。……まったく、何の因果でアレが砕けたのか。聖ジョージのドラゴンでも再来しない限り、法王級の結界が破られるなんてありえないんだけどね」

言葉の終わりは独り言のように、それでいて笑みが消えていた。

だが、それも一瞬。すぐに思い出したように口の端の煙草が小さく揺れる。

「なんで、だよ？」

思わず、答えを期待していないのに上条の口は動いていた。

「何でだよ。俺は魔術なんて絵本信じらんねえし、魔術師みてえな生き物は理解できねえよ。それでもお前達にも正義と悪ってモンがあるんだろ？ 守る物とか護る者とかあるんだろ……？」

こんな小さな女の子を、寄ってたかって追い回して、血まみれにして。これだけの現実を前に！ テメエ、まだ自分の正義を語る事ができんのかよ!!」

「だから、血まみれにしたのは僕じゃなくて神裂なんだけどね」

魔術師は一言で断じた。上条の言葉は微塵も欠片も、響いていなかった。

「もつとも、血まみれだろうが血まみれじゃなかろうが、回収するものは回収するけどね」

「回収、だど？」

意味が分からない。

「うん？ ああそうか、魔術師なんて言葉を知ってるから全部筒抜けかと思ってたけど。ソレは君達を巻き込むのが怖かったみたいだね」

魔術師は煙草の煙を吐いて、

「そう、回収だよ回収。正確にはソレじゃなくて、ソレの持つてる10万3000冊の魔道書だけどね」

……また、『10万3000冊の魔道書』だ。

「そうかそうか、この国は宗教観が薄いから分からないかもしれないね」

魔術師は笑っているのにつまらなそうな声で、

「Index—Librorum—Prohibitum——この国では禁書目録って所か。これは教会が『目を通しただけで魂まで汚れる』と指定した邪本悪書をズラリと並べたリストの事さ。危険な本が出回っていると伝令しても、タイトルが分からなければ知らず知らずの内に手に取ってしまうかもしれないね。——かくして、ソレは

10万3000冊もの『悪い見本』を抱えた、毒書の坩堝と化したつて訳だ。ああ、注意したまえ。ソレが持つてる本ね、宗教観の薄いこの国の住人なら、一冊でも目を通せば廃人コースは確定だから」

そんな事を言つたつて、インデックスは一冊の本も持つていない。あんな体のラインがはつきり見える修道服なら服の下に隠したつて分かるはずだ。大体、10万冊もの本を抱えて人が歩けるはずがない。

「10万3000冊ね……魔道書だかなんだか知んないけど、そんなもん、どこにあるんだよ」

「あるさ。ソレの記憶の中に」

サラリと、魔術師は当然のように答えた。

「頭の、中？」

「完全記憶能力、つて言葉は知ってるかな？ 何でも、『一度見たものを一瞬で覚えて、一字一句を永遠に記憶し続ける能力』だそうだよ。簡単に言えば人間スキャナだね」

魔術師はつまらなそうに笑い、

「これは僕達みたいな魔術でも君達みたいな超能力でもなく、単なる体質らしいけど。彼女の頭はね、大英博物館、ルーブル美術館、バチカン図書館、華子城遺跡、コンピエーニ古城、モン||サン||ミツシエル修道院……。これら世界各地に封印され持ち出す事のできない『魔道書』を、その目で盗み出し保管している『魔道図書館』つて訳なのさ」

信じられる、はずがない。

魔道書なんて言葉も、完全記憶能力なんて言葉も。

だけど、重要なのはそれが『正しい』かどうかじゃない。こうして目の前に、実際にそれを正しいと『信じて』少女の背中を切り刻んだ人間がいる事だ。

「ま、彼女自身は魔力を練る力がないから無害なんだけど」

魔術師は愉快げに口の端の煙草を揺らし、

「そんな安全装置を用意する辺り、『教会』にもいろいろ考えがあるんだろうね。まあ魔術師の僕には関係ないけど。とにかくその10万3000冊は少々危険な代物なんだ。だから、使える連中に連れ去られる前にこうして僕達が保護しにやってきた、って訳さ」

「ほ……、いっ？」

上条は愕然とした。これだけ真つ赤な光景を前に、この男は今なんて言った？

「そうだよ、そうさ。保護だよ保護。ソレにいくら良識と良心があつたって拷問と薬物には耐えられないだろうしね。そんな連中に女の子の体を預けるなんて考えたら心が痛むだろう？」

「……」

カチカチと。上条の体のどこかが震えていた。

それは単純な怒りではない。現に上条の腕には鳥肌が立っている。目の前の男の、自分だけは正しいという考え方。自分の間違いが見えないという生き方。それら全てが、まるで何万匹ものナメクジで満たした風呂に突き飛ばされたみたいな悪寒を全身に駆けずり回らせる。



狂信集団、という言葉がじわりと脳に染み込んでくる。

そんな根拠も理論もない『妄信』のために人間狩りをする魔術師の頭に神経がブチ切れて、

「て————メエ、何様だ!!」

## 08話 魔術師は塔に降り立つ《8》

「て——メエ、何様だ!!」

バギン、と、右手が怒りに呼応するように熱を帯びたような気がした。

地面に縫い留められていた二本の脚が、考えるより早く動く。血と肉の詰まった鈍重な体が弾丸みたいに魔術師へ向かう。右手を、五本の指を粉々に砕く勢いで握り締める。

右手なんて役に立たない。不良の一人も倒せずテストの点も上がらず女の子にもモテない。

だけど右手はとても便利だ。目の前の、クソ野郎を殴り飛ばす機能があるんだから。

「ステイルⅡマグヌスと名乗りたい所だけど、ここはFortis931と言っておこうかな」

なのに、魔術師は口の端を歪めて煙草を揺らしているだけだった。

口の中で何かを呟いた後、まるで自慢の黒猫でも紹介するかのよう  
に上条と蒼空に告げる。

「魔法名だよ、聞き慣れないかな? 僕達魔術師って生き物は、何でも魔術を使う時には真名を名乗ってはいけないそうさ。古い因習だから僕には理解ができないんだけどね」

魔術師との距離は十五メートル。

上条はたったの三步でその距離を半分に縮める。

「Fortis——日本語では強者と言った所か。ま、語源はどうだって良い。重要なのはこの名を名乗りあげた事でね、僕達の間では、魔術を使う魔法名というよりも、むしろ——」

さらに二歩、上条当麻は勢い良く通路を駆け抜ける。

それでも魔術師は笑みを崩さない。上条では笑みを消す相手にはならないとも言おうように。

「——殺し名、かな？」

魔術師、ステイルⅡマグヌスは口の煙草を手にとると、指で弾いて横合いへと投げ捨てた。

火のついた煙草は水平に飛んで、金属の手すりを越え、隣のビルの壁に当たる。

オレンジ色の軌跡が残像のように煙草の後を追いつ、壁に当たって火の粉を散らす。

「炎よ——」

ステイルが呟いた瞬間、オレンジの軌跡が轟！と爆発した。

まるで消火ホースの中にガソリンを詰めて噴いたように、一直線に炎の剣が生み出される。

ジリジリと、写真をライターで炙るように塗装が変色していく。

触れてもいないのに、それを見ただけで目を焼かれるような気がして、上条は思わず足を止めて両手で顔を庇っていた。

ザグン！ と上条の足が地面に杭で打ちつけられたように止まってしまう。

ふとした、疑問。

幻想殺しはあらゆる『異能の力』を一撃で打ち消す事ができる。それは『災害級』と呼ばれる、核シエルターさえ一撃で破壊しかねない御坂美琴の超電磁砲でさえも例外ではない。

けれど、逆に言えば。

上条は未だ『超能力』以外の『異能の力』を見た事がない。  
つまり、試した事がない。

魔術に。

魔術なんていう得体の知れない力に、本当に上条の右手は通用する  
のか？

「——巨人に苦痛の贈り物を」

顔を庇った両手の向こうで、魔術師は笑っていた。

「カミヤん！ 迷うな!!」

蒼空は上条に向けて言い放つ。

ステイルⅡマグヌスは笑いながら、灼熱の炎剣を横殴りに上条当麻  
へ叩き付けた。

それは触れた瞬間にカタチを失い、まるで火山の奔流のように辺り  
構わず全てを爆破した。

熱波と閃光と爆音と黒煙が吹き荒れる。

「やりすぎたか、な?」

まさしく爆弾による爆破事件を前に、ステイルはぼりぼりと頭を掻いた。

「そんな事はないさ」

蒼空はステイルに向けて、微かに笑いながら言う。その声は不思議とステイルの耳に響いた。さつき上条に向けたように大声だった訳でもない。その声は蒼空にとって普段のようには何でもない口調で、何でもない声量だった。けれど、その声は不思議と響いた。

「死を目の前にして気でも触れたのかい？ 安心するといい。こんな程度じゃ1000回やつても僕には勝てない。すぐに彼と同じ場所に送ってあげるよ」

「誰が、何回やつても勝てねえって？」

ギクリ、と。炎の地獄の中から聞こえてきた声に、魔術師の動きが一瞬で凍結する。

轟！ と辺り一面の火炎と黒煙が渦を巻いて吹き飛ばされた。

まるで、火炎と黒煙の中央でいきなり現れた竜巻が全てを吹き飛ばすように。

上条当麻はそこにいた。

飴細工のように金属の手すりはひしやげ、床や壁の塗装はめくれ上がり、蛍光灯は高熱で溶けて滴り落ち———そんな灼熱の地獄の中、傷一つなく少年はそこに佇んでいた。

「……、つたく。そうだよ、そうだよなあ時雨。何をビビってやがんだ

」

上条は、本当につまらなそうに口の端を歪めて呟いた。

「——インデックスの『歩く教会』をぶち壊したのだから、この右手だったじゃねーか」

こうなることを蒼空は確信していた。理由は今の上条の言葉通り。上条の右手がインデックスの『歩く教会』をぶち壊したから。

上条も蒼空も正直、『魔術』なんて言われても何も理解できない。

それがどんな仕組みで動いているものなのか、見えない所で一体何が起きているのか。きつと一から十まで説明されたって半分も理解できないだろう。

だけど、一つだけ分かる事がある。

（所詮、ただの『異能の力』だ。

吹き飛ばされた真紅の火炎は、完全には消滅しない。

まるで上条を取り囲むように、綺麗な円を描いてジリジリと燃え続けている、が。

「邪魔だ」

一言。摂氏3000度の炎に上条の右手が触れた瞬間、全ての炎が同時に消し飛んだ。

まるで、バースデーケーキに刺さったロウソクをまとめて吹き消すように。

上条は目の前の魔術師を見る。

目の前の魔術師は、突然の『予想外』に対し、人間みたいにうろたえていた。

いいや、これは人間だった。

ぶん殴れば痛みを感じるし、一個100円のカッターで切りつければ赤い血を流す、ただの人間だった。

もう上条は、恐怖で足がすくんだり、緊張で体が固まったりはしない。

いつものように、手足は動く。

動く！

「な」

その一方で、ステイルは目の前の理解不能な現象に危うく一歩後ろへ下がる所だった。

周囲の状況を見れば、先の一撃が不発だったとは考えられない。だとすれば、あの少年は生身で摂氏3000度を受け止めるほどの強度があるのか？ いや、それはもう人間ではない。

では後ろにいるあの白髪の少年が何かをしたのか？ それも違う。そんな挙動は一切見せなかった。ただ、白髪の少年はこうなることを確信していた。

上条はステイルの混乱など気にも留めない。

熱を帯びる右手を岩のように強く握り締めながら、ゆらりとステイルの元へ、一歩。

「チッ!!」

ステイルは右手を水平に振るう。生み出される炎剣を同じように、

勢い良く叩きつける。

爆発が起きた。火炎と黒煙が撒き散らされた。

けれど、火炎と黒煙が吹き飛ばされた後には、やはり上条当麻は同じように佇んでいる。

……、まさか。魔術を——？

ステイルは口の中で呟いたが、即座に否定する。こんな魔術はおろか降誕祭を交尾の日としか感じないようなとぼけた国に魔術師なんているはずがない。

それに、——それに、魔力を持たないインデックスが『魔術師』と手を組めば、そもそも『逃げ出す』必要はどこにもない。それほどまでにインデックスの記憶は危険なのだ。

10万3000冊の魔道書とは、単に核ミサイルを持つのでは訳が違う。

生き物は必ず死ぬ、上から落としたリングは下に落ちる、1+1=2……。そんな、世界としては当たり前で、変えようのない『ルール』そのものを破壊し、組み替え、生み出す事ができる。1+1は3になり、下から落としたリングは上に落ち、死んだ生き物が必ず生き返る。

魔術師達はその名を魔神と呼ぶ。

魔界の神ではなく、魔術を極めて神の領域にまで辿り着いた魔術師、という意味の。

魔神。

しかし、目の前の少年からは『魔力』を感じられない。その後ろに



いる少年からも。

魔術師ならば、一目で見れば分かる。あれらには魔術師という『同じ世界の匂い』がしない。

ならば、何故？

「!!」

ぶるつと。全身に走る震えをごまかすように、さらに炎剣を生み出し上条へ叩きつける。

今度は、爆発さえ起きなかった。

上条が羽虫でも振り払うかのように右手で炎剣を叩いた瞬間、ガラスが碎けるように炎剣が粉々に碎け散り、虚空へ解けるように消えてしまった。

摂氏3000度の炎の剣を、何の魔術強化も施していない生身の右手で、叩き碎いた。

「――、あ」

唐突に。本当に唐突に、ステイルⅡマグヌスの脳裏に何かが浮かぶ。

インデックスの修道服『歩く教会』は法王級で、その結界の力はロンドンの大聖堂に匹敵する。アレを破壊するには伝説にある聖ジョージのドラゴンでも現れない限り絶対に不可能だ。

しかし、現に神裂に斬られたインデックスの『歩く教会』は完膚なきまでに破壊されていた。

一体、誰が？ 全体、どうやって？

「……………」

上条当麻はもうステイルの目の前まで歩いてきている。  
あと一歩踏み込んだだけで、殴りかかれるほど近くまで。

「——世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

ステイルの全身から嫌な汗が噴き出した。目の前の夏服を着た生き物が、人間のカタチをしているからこそ。その皮の中には、血や肉ではなくもっと得体の知れないドロドロした何かが詰まっているような気がして、ステイルは背筋が震えるかと思った。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。  
それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。」

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ——  
ッ  
！」

ステイルの修道服の胸元が大きく膨らんだ瞬間、内側からの力でタンが弾け飛んだ。

轟！ という炎が酸素を吸い込む音と同時——服の内側から  
巨大な炎の塊が飛び出した。

それはただの炎の塊ではなかった。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のような黒くドロドロしたモノが『芯』になっている。それは人間のカタチをしていた。タンカーが海で事故を起こした時、海鳥が真っ黒な重油でドロドロに汚れたような——そんなイメージを植え付けるモノが、永遠に燃え続けている

る。

その名は『魔女狩りの王』その意味は『必ず殺す』。

必殺の意味を背負う炎の巨神は両手を広げ、それこそ砲弾のように上条当麻へ突き進み、

「邪魔だ」

ボン!! と。

裏拳気味に、目の前のクモの巣を振り払うぐらいの面倒臭さで。

上条当麻はステイルⅡマグヌスの最後の切り札を吹き飛ばした。まるで水風船を針で刺したように、炎の巨神を象る重油の人型は、飛沫となって辺り一面に飛び散った。

「……、？」

その時。上条当麻が最後の一步を踏み込まなかったのは、何か理屈があつた訳ではない。

だが、最後の切り札を潰されたステイルはそれでも笑っていた。その表情が、不用意に最後の一步を踏み込む事をためらわせた。

「カミヤん、今のはいけた——ツ!？」

ビュルン!! と粘性の液体が飛び跳ねる音が四方八方から響き渡る。

「な、——ツ!？」

驚いて上条が一步後ろへ下がった瞬間、四方八方から戻ってきた黒

い飛沫が空中で寄り集まり、再び人のカタチを作り上げた。

## 09話 魔術師は塔に降り立つ《9》

「な、——ッ!？」

驚いて上条が一步後ろへ下がった瞬間、四方八方から戻ってきた黒い飛沫が空中で寄り集まり、再び人のカタチを作り上げた。

あのまま一步進んでいれば、間違いなく四方八方から襲いかかる炎の中へ取り込まれていた。

上条は目の前の光景に混乱しそうになる。蒼空も同じく。上条の右手『幻想殺し』の謳い文句が正しければ、それは神話に出てくる神様の奇跡さえ一撃で打ち消してしまう。アレが『魔術』とかいう『異能の力』である以上、たった一度触れただけで『全てを無効化』させるはずなのに……

炎の中の重油はのたくり、カタチを変え、まるで両手で剣を持っているような形になる。いや、それは剣ではない。人間でも磔にするような、二メートル以上の巨大な十字架だ。

ソレは大きく両腕を振り上げると、ツルハシでも振り下ろすように上条の頭に襲いかかる。

「……っ!!」

上条はとっさに右手で受け止めた。元より上条は右手を除けば単なる高校生だ。目の前の攻撃を見切つて避けるような戦闘スキルは持ち合わせない。

ガギン! と十字架と右手がぶつかり合う。

今度は『消える』事さえなかった。まるでゴムの塊でも握り締めて

いるように、ともすれば上条の指の方が押し負かされそうになる。相手は両手で、こちらは片手しか使えない。ジリジリと。炎の十字架が上条の顔へと一ミリ一ミリ近づいてくる。

混乱する上条は、かろうじて気づく事ができた。この炎の塊『魔女狩りの王』は確かに上条の幻想殺しに反応している。だが、消滅した直後に復活しているのだ。おそらく消滅と復活のタイムラグは一秒の十分の一にも満たないだろう。

「——ッ!? カミヤん!」

上条の幻想殺しに触れてなおその形を維持する『魔女狩りの王』に蒼空は困惑を隠せなかった。

上条の右手はあらゆる『異能の力』を打ち消す。それが『異能の力』なら打ち消してしまう。

学園都市の頂点に立つ自分の力も、御坂美琴の超電磁砲だって打ち消してしまう。

その右手で打ち消せない。

どうして? 魔術だから?

そんな考えがグルグルと蒼空の頭を巡る。

蒼空は自分の能力で助けに入ろうとするが、この状況では難しい。いや、そもそも『歩く教会』も元に戻す事ができず、上条の『幻想殺し』も効かない魔術という力に、自分の能力が通じるのだろうか。

「——ルーン」

と、蒼空と上条の耳が何かを捉えた。それが誰の声かは一瞬で分

かった。

「——『神秘』『秘密』を指し示す二十四の文字にして、ゲルマン民族により二世紀から使われる魔術言語で、古代英語のルーツとされま  
す」

だが、それがインデックスの声だと分かっているのに、信じられな  
かった。

「い、インデックス……?」

こんなにボロボロで、こんなに血まみれで、どうしてこんな冷静に  
話せるんだ?

「——『魔女狩りの王』を攻撃しても効果はありません。壁、床、  
天井。辺りに刻んだ『ルーンの刻印』を消さない限り、何度でも蘇り  
ます」

押される右手の手首を左手で掴んで、かろうじて上条当麻は十字架  
との均衡を保つ。

上条と蒼空は恐る恐る振り返る。

そこには、確かに一人の少女が倒れていた。けれど、『それ』をイン  
デックスと呼ぶ事ができなかった。まるで機械のようなあまりにも  
感情の欠落した瞳。

一言一言、告げる度に背中の傷から血が溢れていく。

そんな事にも全く気に留めない、まさしく魔術を説明するためだけ  
の『装置』。

「あ……インデックス、なのか？」

「はい。私はイギリス清教内、第零聖堂区『必要悪の教会』所属の魔道書図書館です。正式名称はIndex—Prohibitorumですが、呼び名は略称の禁書目録で結構です」

魔道書図書館——禁書目録という生き方に、上条は自分を殺そうとする炎の巨神の事さえ忘れそうになってしまう。それほどまでの『寒気』がそこにある。

「それよりも怪我を——」

インデックスの発する『寒気』に吞まれていた蒼空だが、インデックスの背中から溢れる血の赤色で気づく。インデックスの体に触れて能力を発動させようとする。が、

「——それはやめた方が良いでしょう。今の私の体に何らかの力が働いた場合、自動迎撃術式が起動する可能性があります」

「迎撃……」

「はい。それでは元のルーン魔術に説明を戻します。——それは簡単に言えば、夜の湖に映る月と同じ……いくら水面を剣で切り裂いても意味はありません。水面に映る月を斬りたければ、まずは夜空に浮かぶ本物の月に刃を向けなければ」

そこまで『説明』されて、上条はようやく目の前の敵の事を思い出した。

ようは、これは『異能の力』の本体ではない、という事か？ 写真とネガのように、どこかでこの炎の巨神を作っている。『他の異能の力』を潰さない限り、何度でも復活してしまう……？



蒼空も臆気ながらにそれを理解する。だが、どうする？ 別の場所にあると言つても、その場所はどこだ？

「灰は灰に――」

ギョツとした。炎の巨神の向こうで、ステイルは右手に炎剣を生み出している。

「――塵は塵に――」

さらにもう一本。左手には青白く燃える炎剣が音もなく伸びる。

「――吸血殺しの紅十字！――」

力ある言葉と同時に、左右から炎の巨神ごと引き裂くように、大ハサミのように二本の炎剣が上条に水平に襲いかかる。『魔女狩りの王』に右手を封じられている上条はこれ以上防ぐ事ができない。

「カミヤ――」

二本の炎剣と炎の巨神が激突し、一つの巨大な爆弾と化して大爆発を引き起こした。

蒼空の叫びはその大爆発に虚しくかき消された。



炎と煙が晴れてみれば、辺り一面は地獄だった。

金属の手すりは飴細工のようにひしゃげ、床のタイルさえも接着剤のように溶け出している。壁の塗装は剥がれてコンクリートが剥き

出しになっている。

少年、——上条当麻の姿はどこにもなかった。

だが、階下の通路を走り去る足音が一つ、蒼空とステイルの耳に届いた。

「……、『魔女狩りの王』」

ステイルがささやくと、辺り一面の炎は人のカタチを取り戻し、手すりを越えて足音を追う。

内心で、ステイルは驚いていた。何の事はない。爆発の直前、ステイルの両手剣が炎の巨神を切り裂いた一瞬を突いて、上条は右手を離して手すりを飛び越えたのだ。

落下した上条は一階下の手すりに掴まって、通路に体を乗り上げたんだらう。命綱も何もなく、ただの根性度胸で実行するにはあまりに命知らずだと思う。

一方で蒼空は一安心、といったところだ。聞こえてきた足音からしてまず動けなくなるような大きな怪我はしていないだろう。小さく息を吐く。

「だけど、まあ」

ステイルはそつと微笑む。インデックスの10万3000冊の知識によってルーンの弱点は突かれた。その通り、ステイルの扱うルーン魔術は『刻印』を刻む事で力を発動させる。逆を言えば『刻印』を消されてしまえばどんな強大な魔術も無効化されてしまう。

「だけど、それが何だ」

ステイルは余裕の表情で。

「彼にはできないよ。この建物に刻んだルーンを完全に消滅させるなんて、彼には絶対に無理だ」

「……本当に？ アイツがアンタの炎を打ち消したのを忘れたのか？」

「忘れてないさ。それでも、だ。彼には絶対に無理だ。君は逃げた方がいいんじゃないか？ ソレをここに置いたままね」

蒼空はインデックスに一瞬、視線を落とす。

この血濡れで横たわる少女とは、インデックスとは、今日出会ったばかり。まだ友人でもない、ただお互いを知っているだけ、というレベルの関係だ。いや、それも違うかもしれない。現にインデックスがこんな世界に生きているなんて全く知らなかった。思ってもみなかった。

だけど、インデックスはそんな自分のために、上条のために危険を冒してまでここへ戻ってきた。そしてこんな大怪我まで。

「いや……ここは勇気を振り絞って断つちやおうかな。NOと言える人間なんでね、俺は」

そんなインデックスをここであつさりど切り捨てられるほど、蒼空は腐ってはいない。幸い、自分は無力ではない。この『学園都市』では頂点に立つ人間の一人だ。

一歩、二歩と蒼空は前に出る。

「悪いけど、インデックスは渡せないね」

「……ふうん、でも彼は逃げたんじゃないのかい？」

「いやいや、アイツはちょっと引くレベルでお人好しだから」

『魔女狩りの王』とやらから逃げられるかどうかはさておいて、あの上条がこの状況から逃げ出す？

ありえない。あの男はなんだかんだ言いながらもこういう状況に自分から突っ込んでいき、こういう状況からは絶対に逃げない。

「そうか、なら死ぬ。——炎よ」

ステイルが腕を振るうと共に、蒼空に向けて一直線に炎が走る。燃え盛るその炎は見るだけで燃やされそうだ。上条のように『異能の力』を打ち消す右手を持つていない蒼空は、このままだとその炎に身を焼かれる。

炎はそのまま蒼空を焼き尽くす……はずだった。その前に、蒼空が右手を軽く振ると、一直線に走っていた炎の塊は蒼空の眼前で不自然に逸れた。いや、曲がったと言った方がしっくりくるかもしれない。

「——なッ!?!」

驚愕し、目を見開くステイルを見て蒼空は口の端を僅かに吊り上げる。

確かに炎は蒼空を焼き尽くすつもりだった。曲がるなんて事はありえない。ステイルはまっすぐ、骨すら残さないうつもりで蒼空に炎を放った。

しかし、蒼空が炎に包まれる事はなかった。炎は蒼空に届きもしなかった。炎が曲がったから、蒼空が炎を曲げたから。

口の端を僅かに吊り上げ、小さく笑う蒼空は傍から見れば不敵、余裕ともとれる表情をしているが、内心は炎は曲がるかどうか直前まで確信が持てず、心臓はバクバクである。しかし結果は、炎は曲がった。蒼空が曲げた。

いける。あとはあそこに立っている魔術師をこの手でぶん殴るだけだ。上条の御株を奪うようで少しばかり気が引けるが。

蒼空がさらに一步、前へと足を踏み出した時だった。

建物中に設置された火災報知器のベルが、一斉に鳴り響いた。

「!？」

爆撃のような轟音の嵐に、ステイルは思わず天井を見上げる。

一秒すら待たずに取り付けられたスプリンクラーが台風のような人工の雨を撒き散らした。一応、消防隊を呼ぶと面倒臭い事になるので『魔女狩りの王』には警報装置に触れないように命令文を書いてある。となると、上条当麻が火災報知器のボタンを押したんだろう。

まさか、『魔女狩りの王』という炎の塊を消すために？

「……」

馬鹿馬鹿しくて笑いも起きないが、そんなつまらない理由でびしょ濡れにされると思うと魔術師は頭の血管が切れるかと思った。

ステイルは壁に取り付けられた、真っ赤な火災報知器をいまいましげに睨みつける。

ベルを鳴らすのは簡単だが、こちらから止める事はできないだろう。夏休みの学生寮という事でほとんどの住人は出払っているが、消防隊がやってくると面倒な事になるかもしれない。

「……、チツ」

ステイルはぐるりと辺りを見回し、それから面倒な状況に舌打ちした。

目的はあくまでインデックスの回収。手っ取り早く蒼空を殺してインデックスを拾って立ち去ればいい。が、蒼空は何らかの力を持っている。『魔女狩りの王』をこっちに寄越せばどうにかなるだろうが、そうすると上条の方に手が回らなくなる。

面倒だ、本当に面倒臭い。

そんなステイルの耳に、キンコン、と電子レンジみたいな音が聞こえてきた。

誰が？ 誰がエレベーターに乗ってきた？

夏休みの夕暮れという時間帯、生徒達は完全に出払っていて学生寮が無人状態である事は確認済みだ。ならば、一体誰が、全体どうしてエレベーターなんかを動かす必要がある？

がががごと、と。ガラクタみたいなエレベーターの扉が開く音が鳴り響く。カツン、と。ただの一步だけ、スプリングラーに濡れた床を踏む足音が、通路に響く。

ステイルは、ゆっくりと振り返る。

一体どうして体の内側が小刻みに震えているのか、そんな理由も分からずに。

## 10話 魔術師は塔に降り立つ《10》

ステイルは、ゆっくりと振り返る。

一体どうして体の内側が小刻みに震えているのか、そんな理由も分からずに。

上条当麻が、そこにいた。

(……何だ？ 自動追尾の『魔女狩りの王』は一体どうしたんだ?)

ステイルの中でぐるぐると思考が空回りする。『魔女狩りの王』は戦闘機に積んだ最新鋭のミサイルと同じようなものだ。一度でもロックしたら最後、絶対に逃げ切る事はできないし、どこへ逃げようが隠れようが、3000度という炎の塊は壁や障害物——そう、鋼鉄さえ溶かして一直線に進んでくる。普通に建物を走り回るだけで振り切る事なんてできるはずがない。

なのに、上条当麻はそこにいた。

不敵に。無敵に素敵に宿敵に、そして何より天敵として——  
立っていた。

「そーいや、ルーンってのは壁や床に『刻む』モンだったんだっけな」

上条は冷たい人工の雨に打たれながら、

「……まったく、参ったぜ、アンタすげえよ。正直、ホントにナイフ使って刻まれてたら勝ち目ゼロだったよ、こいつは周りに自慢したって構わねーぜ」



言いながら、上条当麻は右腕を上げて、人差し指で自分の頭上を指差した。

天井、スプリンクラー。

「……まさか。まさか！ 3000度の炎の塊が、こんな程度で鎮火するものか！」

「ばーか。炎じゃねえよ、テメエは人ん家に何ベタベタ貼っつけてやがった？」

ステイルは思い出す。学生寮に何万枚と仕掛けた『ルーン』はコピー用紙だった事を。

紙は水に弱い。幼稚園児でも分かる理屈だ。

スプリンクラーを使って建物中を走り回る必要もなく、ボタン一つで全ての紙切れを殺す事ができる。

魔術師は思わず顔面の筋肉を痙攣させて、

「——『魔女狩りの王』！」

叫んだ瞬間、上条の背後から——エレベーターの扉をアメ細工のように溶かしながら、炎の巨神が通路に這い出てきた。

しゅうしゅう、と。炎の体に雨粒がぶつかるたびに獣の吐息のような蒸発音が響く。

「は、はは。あははははははは！ すごいよ、君ってば戦闘センスの天才だね！ だけど経験が足りないかな、コピー用紙ってのはトイレッ

トペーパーじゃないんだよ。たかが水に濡れた程度で、完全に溶けてしまうほど弱くはないのさ！」

ギチギチと。両手を広げて爆発するように笑いながら、魔術師は『殺せ』と叫んだ。

『魔女狩りの王』は、その腕をハンマーのように振り回して、

「邪魔だ」

一言。上条当麻は、振り返りすらしなかった。

ずぼん、と。裏拳気味の上条の右手に触れた炎の巨神は、正直笑ってしまふほど間拔けな音を立てて爆発、四方八方へ吹き飛ばされた。

「な!?!」

その瞬間、ステイルⅡマグヌスの心臓は確かに一瞬だけ驚きで停止した。

吹き飛ばされた『魔女狩りの王』が、復活しない。重油のように黒い肉片は辺り一面に飛び散ったまま、もぞもぞとうごめくのが精一杯のようだった。

「ぼ、か——な。なぜ、何故！ 僕のコピー用紙はまだ死んでないのに……ッ！」

「インクは?！」

上条当麻の声がステイルの耳まで届くのに、五年はかかるかと思っ

「コピー用紙は破れなくつても、水に濡れりやインクは落ちちまうん  
じゃねーか？」

上条は、むしろのんびりとした調子で、

「……ま、それでも一つ残らず潰す事はできなかつたみてえだが」

もぞもぞと動く『魔女狩りの王』の破片。

スプリンクラーが生み出す人工の雨が降り注ぐたびに、黒い肉片が  
一つ、また一つと空気に溶けるように消えていく。まるで建物中に貼  
り付けたコピー用紙のインクが一つ一つ雨に溶けていき、どんどん力  
を失っていくように。

一つ一つ肉片が消えていき……ついには最後の一つまで、溶けるよ  
うに消えていく。

「い、いのけんていうす……『魔女狩りの王』！」

魔術師の言葉は、まるで一方的に切られた電話の受話器に叫ぶよう  
な声だった。

「おーい、天才の上条くーん、ソイツをぶん殴る役目はお前に譲ってや  
るよー！」

蒼空の言葉に上条は分からないぐらいに小さく頷く。

「やっ、と」

たった一言。上条の言葉に、魔術師は体全体をビクンと震わせた。

上条当麻の足が一步、ステイルⅡマグヌスの元へと踏み出される。

「い、の……けんていうす」

魔術師は告げる。——けれど、世界は何も応答しない。

上条当麻の足がさらに、ステイルⅡマグヌスの元へと歩き出す。

「いのけんていうす………イノケンティウス、魔女狩りの王！」

魔術師は叫ぶ。——けれど、世界は何も変化しない。

上条当麻の足がついに、ステイルⅡマグヌスの元へ弾丸のように駆け抜ける。

「ア、——灰は灰に、塵は塵に。吸血殺しの紅十字！」

魔術師はついに吼えた。けれど、炎の巨神はおろか、炎の剣さえ生まれなかった。

上条当麻の足はそして、ステイルⅡマグヌスの懐まで飛び込み、さらに奥へと突き進み、拳を、握る。

何の変哲もない右手。相手が『異能の力』でない限り、何の役にも立たない右手。不良の一人も倒せず、テストの点も上がらず、女の子にモテたりする事もない、右手。

だけど、右手はとても便利だ。

何せ、目の前のクソ野郎を思う存分ぶん殴る事ができるんだから。

上条当麻の拳が魔術師の顔面に突き刺さる。

魔術師の体は、それこそ竹とんぼのように回転し、後頭部から金属の手すりへ激突した。

## 11話 奇術師は終焉を与える《1》

夜。表通りから消防車と救急車のサイレンが響き渡り——通  
りすぎた。

学生寮はほぼ無人状態だったらしいが、火災報知器を鳴らしてスプリンクラーを動かしたのがまずかった。消防車と野次馬で無人の学生寮はあつという間に人だらけになったのだ。

蒼空が持っていた発信機<sup>発信機</sup>の機能は上条の右手で破壊した。機能を生かしたまま適当な所に捨てれば追っ手の目をごまかせたのだが、彼女が頑なに持つて行くといいはった。

「なあ時雨、お前の力でインデックスの傷を治す事は出来ないのか？」  
「できる、はず……。能力が機能するのかどうかって話なら、カミヤンみたいな右手を持つてない限りは機能するはずだ」  
「じゃあなんでッ!？」

上条は非難するような目で蒼空を見る。上条の勢いよく投げかけた疑問には、その上条の腕に抱かれるインデックスが答えた。

「術式、だよ。それも迎撃用のね……。そら、は……。さつきも傷を治そうとしてくれたんだよ。今の私の体に超能力なんてものが働いたら、何が起こるか分からない、から」

上条は舌打ちをした。また魔術か、と。血まみれのインデックスを未だ抱えたままで——この傷口を、こんな小汚い地面に触れさせる事はいかなかった。

インデックスを救急車に乗せる事はできない。

学園都市は基本的に『外の人間』を嫌う傾向がある。そのために、街の周りを壁で覆い、三基の衛星が常に監視の目を光らせるほどの徹底ぶりだ。コンビニに入るトラック一台にしたって、専用のIDがなければ話にならない。

そんな所に、IDを持たない部外者が入院したとなれば、あつという間に情報は洩れる。

そして、敵は『組織』だ。

そんな所を襲撃されれば周りの被害が拡大するだけだし——何より、治療を受けている最中、最悪、手術中にインデックスが狙われたらもう防御手段なんて何もない。

「……けど、だからってこのままほっとく訳にもいかねんだよな」  
「だい、じょうぶ。だよ？ とにかく、血を止める事ができれば……」

インデックスの口調は弱々しく、さっきのような機械的な印象はなかった。その様子を見れば分かる。彼女の怪我は包帯を巻いて済むような怪我のレベルを超えている。ケンカ慣れしている上条は『人には言えない傷』は大抵自分で応急処置してしまう。そんな上条でさえ思わず取り乱しそうになるぐらいインデックスの背中への傷は、酷い。

蒼空の能力も迎撃術式やらなんやらのせいで使えない。そうなるに頼りになる可能性は一つしかない。

未だに信じられないけれど、もはや信じる他には道がない。

「おい、オイ！ 聞こえるか？」

上条はインデックスの頬を軽く叩いて、

「お前の10万3000冊の中に、傷を治すようなモンはねーのかよ？」

蒼空達にとって魔術のイメージなんてRPGに出てくる攻撃魔法と回復魔法ぐらいしかない。確か、インデックス自身は『魔力』を扱う素質がないから魔術を使う事はできない。だけど、同じ『異能の力』を扱う蒼空と上条ならば、インデックスから知識を聞き出せば可能性があるかもしれない。

激痛よりも失血のせいで浅く呼吸を繰り返すインデックスは、青ざめさせた唇を震わせ、

「……………ある、けど」

一瞬喜びかけたが、『けど』という言葉が引かなかった。

「君には…………無理。たとえ私が術式を教えて……………、君が完全にそれを真似した所で…………、君の能力がきつと邪魔をする」

上条は愕然と自分の右手を見た。

幻想殺し。そこに宿る力は確かにステイルの炎も完全に打ち消していた。なら同じようにインデックスへの回復魔法も打ち消してしまうのかもしれない。

「く、そー！ そうだ、時雨なら！」

自分が無理ならば蒼空が。蒼空も『異能の力』を扱うが、その力は幻想殺しのようなものではない。それならば回復魔法を扱う事がで



きるかもしれない。

「……………」

インデックスはちよつとだけ黙って、

「ううん……。それでもダメ。君の右手じゃなくて……『超能力者』っていうのが、もうダメなの」

「どういうことだ？」

「魔術っていうのは……、君達みたいに『才能ある人間』が使うためのモノじゃないんだよ……。『才能ない人間』が……、それでも『才能ある人間』と同じことがしたいからって……。……、生み出された術式と儀式の名前が、……魔術」

こんな時にナニ説明してんだ、と上条が叫ぼうとした所で、

「分からない……。……？ 『才能ある人間』と『才能ない人間』は……。……、回路が違うの……。『才能ある人間』では……。『才能ない人間』のために作られた魔術を使う事は……。……、できない……。……」

蒼空と上条は絶句した。確かに蒼空達『超能力者』は薬や電極を使い、普通の人間とは違う脳の回路を無理矢理に拡張している。体の作りが違うと言われれば、確かに違うのだ。

学園都市に住む230万人もの学生、その全てが能力開発の『時間割り』カリキュラムを受けているのだ。それは蒼空のように学園都市の頂点に立つ能力者だろうが上条のように最弱の能力者だろうと変わらな  
い。やはり一般人とは作りが違う。

つまり、この街にいる人間では、彼女を唯一救える『魔術』を使う

事はできない。目の前に人を救う方法があるのに、誰にも彼女を助ける事が、できない。

「ち、くしょう……、そんなのって、あるか。そんなのってあるのかよ！　ちくしょう、何なんだよ！　何で、こんな………ッ!!」

インデックスの震えが酷い。

蒼空と上条は自分の無力を噛み締める。何が『超能力者』だ、何が『才能ある人間』だ。こんなに苦しんでいる女の子ひとり救えないで。

（どうする？　こうなりや迎撃術式だのなんだのは無視して俺の能力で治すか？　いやでも、リスクが大きいか……？）

最悪、迎撃術式がインデックスから情報を引き出されるのを防ぐために何らかの形でインデックスの命を絶つものだったら？　自爆なんてものだったりしたら？　だとしたらどうしようもない。魔術という蒼空達には得体の知れない力が働いている以上はインデックスに對して不用意に能力を使う事はできない。

「な、なあ時雨、学園都市の能力開発は学生だけだよな？」

思案していた蒼空に上条が勢いよく言った。

「ん？　まあそりゃそう……あ、そういう事か！」

上条の言葉に、少し遅れて蒼空も同じ考えに辿り着いた。

確かに、学園都市の学生達は230万人もれなく全員が能力開発を受けている。だが、逆に言えば。超能力を開発する側の教師はただの人間のはずだ。

「……あの先生、この時間でもう眠ってるなんて言わねーだろうな」  
「どーだかね。あの見た目だし」

蒼空達は一人の教師の顔を思い浮かべる。

クラスの担任、身長135cm、教師のくせに赤いランドセルが良く似合う一人の先生、月詠小萌の顔を。

## 12話 奇術師は終焉を与える《2》

蒼空のケータイで青髪ピアスから小萌先生の住所を聞き出した。ちなみになぜ青髪ピアスが住所を知っていたのかは不明だ。(ストーリーカー疑惑あり)

上条がインデックスを背負い、一刻も早く小萌先生の家へ向かうために蒼空の能力で転移。何度か転移を繰り返し、ものの数分でそこに着いた。

そこは見た目12歳の人が住んでいるとは思えない超ボロい木造二階建てのアパートだった。通路に洗濯機が置かれているのを見ると、どうも風呂場という概念は存在しないらしい。

普段なら笑いの種になるところだが、今は蒼空も上条も少しも笑いが起きなかった。

上条が一階、蒼空が二階で手分けして一つずつドアの表札を確かめる。

「カミヤん、あったぞ」

『つくよみこもえ』と、ひらがなで書かれたドアプレートを見つけたのは二階を探していた蒼空だった。部屋を見つけた蒼空は上から上条を呼ぶ。

ボロボロに錆びた階段を上がり、一番奥まで歩いたところに部屋があった。

ぴんぽんぴんぽん、と二回チャイムを鳴らして上条は思いっきり

ドアを蹴破ることにした。ドゴン、と上条の足がドア板に激突して凄まじい音を立てる。

(おいおい……)

一刻を争う状況なので仕方ないが、いきなり人の家のドアを蹴破ろうとするのはどうかと蒼空は思う。だからバチが当たったと言うべきか、それともこんな時でも上条は不運なのか、足の親指の辺りで嫌な音が鳴った。ドアはびくともしなかつたのに。

「~~~~ツ!!」

「はいはいはい、対新聞屋さん用にドアだけ頑丈なんですー。今開けますよー?」

素直に待つてれば良かった、と上条が涙目で思っていると、ドアがちやりと開いて緑のぶかぶかパジャマを着た小萌先生が顔を出した。そののんびりとした顔を見ると、位置の関係でインデックスの背中の中の傷は見えていないようだった。

「うわ、上条ちゃん。新聞屋さんのアルバイト始めたんですか? それに時雨ちゃんまで」

「シスター背負って勧誘する新聞屋がどこにいる?」

上条は不機嫌そうに、

「ちよつと色々困ってるんで入りますね先生。はいごめんよ!」

「ちよ、ちよちよちよちよつとーっ!」

玄関に立つ小萌先生をぐいぐいと押して部屋に入ろうとすると、小萌先生は慌てて上条の前に立ち塞がる。

「せ、先生困ります、いきなり部屋に上がられるというのは。いえそのっ、部屋がすごい事になってるとか、ビールの空き缶が床に散らばってるとか灰皿の煙草が山盛りになってるとかそういう事ではなくてですね!」

「先生」

「はいー?」

「……俺が今背中に抱えるモノ見て同じギャグが言えるかどうか試してみろ」

「ぎゃ、ギャグではないんですー……つて、ぎゃああ!」

「今気づいたんかよ!」

「上条ちゃんの背中が大つきくて怪我してるって所まで見えなかったんです!」

突然の血の色にあわあわ言ってる小萌先生を蒼空が自身の背後に転移させる。前を塞ぐものがなくなった上条はそのまま勝手に部屋に入る。

「げっ……」

部屋の中に入った蒼空の口から思わずそんな声が漏れた。

なんていうか、競馬好きのオッサンが住んでそうな部屋だった。ロボロの畳の上にはビールの缶がいくつも転がり、銀色の灰皿には煙草の吸殻が山盛りにされている。部屋の真ん中にはガンコ親父がひっくり返しそうなちやぶ台まであった。

「……なんていうか。ギャグじゃなかったんですね、先生」

と、上条。

「こんな状況で言うの何ですけど、煙草を吸う女の人は嫌いなんで

すー?」

「別に嫌いじゃないけど、煙草は嫌いだな」

問いかける小萌先生と、その問いに答える蒼空にもそういう問題じゃねえと、上条は転がるビール缶を蹴り飛ばして場所を空ける。ロボロの畳の上、というのは少し気が引けたが、いちいち引いている余裕もない。

背中への傷が床に触れないように、上条はインデックスをうつ伏せに寝かせた。破れた服の布が邪魔で直接傷が見える事はないが、赤黒い染みが重油のように溢れている。

「救急車は呼ばなくて良いんですか? で、電話そこにあるですよ?」

小萌先生がブルブルと震えながら部屋の隅を指差す。何故か黒いダイヤル式の電話だった。

「――出血に伴い、血液中にある生命<sup>マ</sup>力が流出しつつあります」

ギクン、と。三人は反射的にインデックスの顔を見た。

インデックスは相変わらず畳の上に手足を投げ出して倒れたままだ。だが、倒れたまま、まるで壊れた人形みたいに顔を横倒しにしたまま、インデックスは静かに目を開けている。

それは青ざめた月の光よりも冷たく、時を刻む時計の歯車よりも静かな。

人間としてありえないほど完璧な、『冷静』なる瞳だった。

「――警告、第二章第六節。出血による生命力の流出が一定量を越えたため、強制的に『自動書記』ヨハネのペンで目覚めます。……現状を維持すれば、ロンドンの時計塔が示す国際標準時刻に換算して、およそ十五分後に私の体は必要最低限の生命力を失い、絶命します。これから私の行う指示に従って、適切な処置を施していただければ幸いです」

小萌先生はぎよつとしたようにインデックスの顔を見た。

無理もないと蒼空と上条は思う。これで二度目になるが、どうしてもこの声に慣れる事はできない。

「さて……」

上条は小萌先生の顔を見て考える。

この状況でいきなり『魔法使ってください先生！』などと頼んだら『この非常事態に魔法少女ごっこですか上条ちゃん！ 先生はそんな歳じゃありません！』とか言われるに決まってる。

どう説得すればいいものやら。という視線を蒼空に送る。が、学園都市の教師に魔術だなんだの信じさせる方法というのはなかなか思い浮かばない。

蒼空は上条に困ったような、少し申し訳ないような表情を返した。

「……ふむ。先生、非常事態なんで手短に言いますね。ちよろつと内緒話、こつちくる」

「はーっ」

こいこい、と上条が子犬を呼ぶように手を振ると、小萌先生は警戒心ゼロで近づいてくる。



そして上条はごめん、と上条は一応口の中で謝って、敗れた布をめぐって、隠されていた醜い傷口を一気にさらけ出した。

「ひいっ!?!」

ピクンと小萌先生の体が震えたのも、無理はない。

ある程度の怪我は見慣れているはずの蒼空と上条もショックを受けるほどのひどい傷だった。腰の辺りから横一線に、まるで段ボールに定規を当ててカッターで切り込まれたような傷。赤黒い血の奥に、ピンク色の筋肉や黄色い脂肪、果ては白く硬い——背骨のようなものまで見えた。

ぐっ……、と眩暈を殺しつつ、上条は血に濡れた布を静かに下ろす。

傷口に布が触れても、インデックスの氷のような瞳はピクリとも動かなかった。

「先生」

「へ？ ひゃい!?!」

「今から救急車、呼んできます。先生はその間、この子の話を聞いて、お願いを聞いて……とにかく絶対、意識が飛ばないように。この子、服装通り宗教やってるんで、よろしくです」

気休め、なんて言葉を使えば『魔術』なんて『ありえないもの』も頭から否定しなくなるだろう。とにかく小萌先生にとつて重要な事は『適切な傷の手当』ではなく、『無理矢理にでも会話を続ける事にして』にすり替えたのだから。

実際、小萌先生は顔面蒼白なまま、超真剣にこくこく頷いている。

唯一の問題は、上条が外で時間を潰さなければならぬということだ。

『魔術』が終わる前に救急車を呼んでしまうと、その時点で『気休め』が中断されてしまう。つまり救急車は呼んではいけないのだ。

けど、それは『外へでなければならぬ』理由にはならない。何なら部屋の黒電話で117にでも電話して、自動音声に救急車でも呼ぶ演技をすれば良いだけなんだから。

問題なのは、そこではない。

「なあ、インデックス」

上条は、倒れたままのインデックスにそつと話しかける。

「なんか、俺にやれる事ってないのか？」

「——ありえませんが。この場における最良の選択肢は、あなたがここから立ち去る事です」

あまりにも透明で真っ直ぐな言葉に、上条は思わず右手の拳を痛くなるほど握りしめた。

上条に、やれる事なんて何も無い。蒼空には上条がそれを分かっている、それでも聞いたように思えた。

この部屋にいれば、それだけで回復魔法を打ち消してしまう『右手』があるから。

「……じゃ、先生。俺、ちよつとそこの公衆電話まで走ってきます。時

雨も……あとは頼んだ」

「て、……え？　上条ちゃん、電話ならそこに――」

上条は小萌先生の言葉を無視してドアを開け、部屋を出て行く。蒼空は黙ってその後ろ姿を見ていた。

「あの、時雨ちゃん……私はどうすれば……？」

小萌先生はその場に残った時雨に答えを求めるが、

「……悪い、先生。俺も公衆電話に行ってくる。とにかく、あいつも言った通り、その子の言葉を信じて、言う事を聞いてやってくれ。よろしく」

そう言って蒼空も部屋を後にした。

13話 奇術師は終焉を与える 《3》

「——カミヤん」

己の無力を握りしめ、夜の街を走っていた上条は後ろから聞こえてきた声にその足を止めた。その声の主は蒼空だ。かなり全力で走っていた上条だったが、蒼空の能力を用いれば、走っている人間に追いつくぐらい容易なことだ。

「……………！ 時雨……………、お前まで来たのか。お前は別に出てこなくても……………」

「んー、まあ俺も超能力者だし、魔術に何か影響あるかも知らねーからな」

上条の異能の力を打ち消す右手とは関係なく、超能力者があの場にいること自体が魔術へのノイズになる可能性もある。失敗に繋がるかもしれないリスクはなるべく少なくしておきたい。というのは半分本音で半分建前。もう半分は単純に上条に声をかけてやりたかった、というのがもう半分の本音だ。

……………

少しの間、沈黙が流れる。

「……………、全力疾走なんてしてないで、歩こうぜ」

沈黙の中、最初に口を開いたのは蒼空だった。その言葉通り、蒼空と上条は止めていた足をゆっくりと動かし始めた。

「なんつーか、まあキツイよな。あんなこと言われたら」

走っていた影響で、少し荒かった上条の呼吸が落ち着いたところを見計らって、蒼空は口を開いた。

二人は先程のインデックスの言葉を思い出す。『出ていくのが最良』と、あんな無機質な光の消えた瞳で、冷たくそう告げられたらいくらなんでも辛い。上条もそれが正しいと分かっている。仕方ないことだとは分かっている。

「分かっていた。分かっちゃいたんだ。俺にはどうしようもできなかったって。それでも……」

上条は再び、強く右手の拳を握りしめる。上条が何よりも悔しいのは、インデックスから放たれたその台詞ではない。何もできなかった自分が何よりも悔しいのだ。

(どんだけお人好しだよ……、ホントすげーな)

今日出会ったばかりの女の子のためにここまで自分を責める事ができるなんて。もちろん蒼空だってインデックスを助けよう、助けたいという気持ちはある。それでも上条にはとても敵わない。関心と少しの呆れが混じった感情で、拳を握りしめる上条を見る。

そして、一息吐いて、

「……………、カミヤンだけじゃない。俺もだ。俺も、何にもできちゃいない」

何もできなかったのは上条だけではない。蒼空も同じだ。学園都市の頂点に立つ超能力者でも、どんな異能の力も打ち消す右手を持っている。インデックスの傷を治す事はできなかった。

「ま、適材適所ってやつなのかね。インデックスも言ってたろ？ 超能力者じや魔術は使えない、ってな。何でもかんでもできる方がおかしいってもんだ」

冗談を言う時のような軽い口調で蒼空はそう言ったが、上条の顔は沈んだままだ。

「今はとりあえず、怪我の事は小萌先生に任せるしかない」

どんな魔術、魔法が行われるのかは分からないが、蒼空と上条にはその成功を祈るしかない。

「……そうだな」

上条は乾いた笑みを見せた。

「それに、カミヤんの右手も、俺の能力もいずれ役立つさ」

「どういうことだ？」

蒼空の言葉に、上条は勢いよく蒼空の方を向く。疑問を投げかけられた蒼空は、その疑問に答える前に、ちよいちよいと指で近くにあった自販機を示す。

蒼空はその自販機で『ヤシの実サイダー』を二つ購入する。

「ほれ、奢り」

一つはもちろん上条に渡す。

「ああ、サンキュー」

ひとつ走りした上条にとって水分はありがたい。そうでなくとも、蒼空と上条はしばらく水分を摂る暇なんてなかったもので、一人とも喉を鳴らして『ヤシの実サイダー』を飲む。乾いた喉を炭酸が刺激し、潤した。

「ふう……、それで時雨、さっきのはどういうことだ？」

「ああほら、さっきの赤髪のアイツ」

ステイル、といったか。つい先刻、蒼空達を襲った炎を操る魔術師。

「カミヤんがボコった訳だけど、もう襲って来ません、なんて事はないんじゃないのか」

蒼空の言葉に、上条はハツとした反応を見せる。

インデックスにあればどこまでの傷を負わせてでも捕らえようとした男だ。そもそもインデックスだって逃げ続けて、逃げ続けて、この学園都市までやって来たらしい。そこまでインデックスを追い続けているあの男が、このまま大人しく引き下がると考えるのは、少し甘い観測だろう。加えて敵が『組織』である事も分かった。むしろさらに力を入れて襲って来る可能性だってある。

「その右手は魔術にも通用するらしいし、お前がインデックスのためにできる事はまだあるさ」

上条は握りしめた右手の拳を見つめる。

「そうか……、そうだよなあ。沈んでる場合じゃねえよなあ！」

そう言った上条の顔は少しずつ、いつもの熱を取り戻していく。

「そのとーり。らしくもなく気を落としてんじゃねーよ。バカはバカらしく前だけ向いとけ」

「最後の一言は余計なのでは？ 時雨さん」

蒼空と上条は小さく笑う。もう蒼空と上条の間には沈んだ空気はなかった。そして、蒼空のケータイに小萌先生からの着信があったのも、それとほとんど同時だった。



14話 奇術師は終焉を与える《4》

一夜明けると、インデックスには風邪と良く似た症状が出て、高熱と頭痛でぶっ倒れた。しかしこれは魔術が失敗した訳ではない。インデックス曰く、本当に風邪と一緒に『足りない体力を補おうと』しているだけらしい。

「……、で？ 何だって下ぱんつなんだお前」

おでこに濡れタオルを載つけたインデックスは布団の中の蒸し暑さが許せないのか、片足を布団の横から上条に向けて、でろっと飛び出させている。上は淡い緑色のパジャマのくせに根元まで見えている太腿は目が潰れるくらい眩しい肌色で、熱のせいか桜色に上気している。

小萌先生はおでこの上の生ぬるくなったタオルを水を張った洗面器にじゃぶじゃぶ突っ込みながら、その訳を説明してくれた。

「あの修道服は暑苦しそうだったので着替えさせたのですよ」

「……じゃあまあそれはいいんだけど。何だってビール好きで愛煙家の大人な小萌先生のパジャマがインデックスにピッタリ合っちゃうんだ？ 年齢差、一体いくつなんだか」

なつ、と小萌先生（年齢不詳）は絶句しかけたが、インデックスは追い討ちをかけるように、

「……みくびらないでほしい。私も、流石にこのパジャマはちよっと胸が苦しいかも」

「なん……、馬鹿な！ バグってるです、いくら何でもその発言は舐め

すぎです！」

「ていうかその体で苦しくなる胸なんてあつたんか!？」

「……」

(上条……、ホントに怖いもの知らずだな。バカって恐ろしい)

レディ二人に睨まれた。ついでに蒼空に呆れた視線を向けられた上条は、反射的に魂の土下座モードへと移行。

「ところで上条ちゃん、結局この娘はどこの子なんです?」

「妹」

「大嘘にもほどがあるですモロ銀髪碧眼の外国人少女です!」

「じゃあ俺の妹」

「むむ、時雨ちゃんの妹ですか。それなら……って、じゃあってなんですか!」

小萌先生が事情を聞きながらのも無理はない。ただでさえ得体の知れない外国人を連れ込んで、しかも背中には明らかに事件性を匂わせる刀傷、挙げ句の果てには『魔術』などという訳の分からないモノの片棒を担がされたのだ。

これで黙って目を瞑ってるという方が無理難題というものだろう。

「先生、一つだけ聞いても良いですか?」

「ですー?」

「事情を聞きたいのは、この事を警察や学園都市の理事会へ伝えるためですか?」

です、と小萌先生はあっさり首を縦に振った。

何のためらいもなく、人を売り渡すと、自分の生徒達に向かって言

い捨てた。

「上条ちゃん達が一体どんな問題に巻き込まれているか分からないですけど」

小萌先生はにっこり笑顔で、

「それが学園都市の中で起きた以上、解決するのは私達教師の役目です。子供の責任を取るのが大人の義務です、上条ちゃん達が危ない橋を渡っていると知って、黙っているほど先生は子供ではないのです」

月詠小萌はそう言った。

何の能力もなく、何の責任もないのに。

ただ真つ直ぐに、あるべき所へあるべき一刀を通す名刀のような『正しき』で、言った。

「本当に……」

……この人には敵わないと、上条は口の中だけで呟いた。

こんなドラマに出てくるような、映画の中でも見なくなったような『先生』なんて、蒼空達は十数年を生きてきたそれなりに長い人生の中でもたった一人しか見当たらない。

(……カッコイイ先生だな)

蒼空も心の中でそう呟く。

そんな先生だからこそ、

「先生が赤の他人だったら遠慮なく巻き込んでるけど、先生には魔術の借りがあるんで巻き込みたくないんです」

これ以上巻き込む訳にはいかない。上条も、真っ直ぐと告げた。

もう、無償で誰かの盾になるような人間が、目の前で傷つく所なんて、見たくなかった。

そんな上条の台詞を聞きながら、蒼空は「あれ？俺は最初から巻き込まれなかった？」と思ったが、良い所なので仕方なくそれを飲み込んだ。

上条の言葉に、小萌先生はちよつとだけ、黙った。

「むう。何気にかつくいー台詞を吐いてごまかそうたって先生は許さないですよー？」

「……、？ けど先生、いきなり立ち上がったたりしてどこへ……？」

「執行猶予です。先生スーパー行つてご飯のお買い物をしてください。上条ちゃん達はそれまでに何をどう話すべきか、きっちりかつちり整理しておくんですよ？ それと」

「それと？」

「先生、お買い物に夢中になると忘れるかもしれません。帰ってきたらズルしないで上条ちゃん達から話してくれなくつちやダメなんですからねー？」

そう言った小萌先生は、笑っていたと思う。

パタン、とアパートのドアが開閉する音が響き、部屋には蒼空と上条とインデックスの三人だけが取り残された。

何となく。あの何か企んだ子供みたいな笑顔を見ると、もう『スパー』から帰ってきた』小萌先生は『全部忘れていた』事にしてしまうような気がする。

それでいて、後からやっぱり相談したとしても『どうして早く言わなかったんですか!? 先生キレイに忘れてました!』とかぶりぶり怒りながら嬉しそうに相談に乗ってくれるんだろう。

ふう、と上条は蒼空と布団の中のインデックスの方を振り返る。

「……、悪りいな。少しでも助けが欲しいって状況かもしれないねえってのに」

「ううん。あれでいいの」

「ま、これ以上巻き込むのも悪いしな。俺も賛成だよ」

「その言う通りなんだよ。……それに、もうこれ以上あの人は魔術を使っちゃダメ」

「……?」

蒼空と上条は眉をひそめる。

「魔道書っていうのは、危ないんだよ。そこに書かれている異なる常識『異常識』に、違える法則『異法則』——そういう『違う世界』つて、善悪の前に『この世界』にとつては有毒なの」

コンピュータのOSに対応していないプログラムを無理矢理に走らせるようなものなんだろうか？

「……私は宗教防壁で脳と心を守ってるし、人間を超えようとする魔術師は自ら常識げんかを超え、発狂たどりつくする事を望んでる。けど、宗教観の薄い普通の日本人なら——もう一度唱えれば、終わる」

「ふ、ふうん……」

上条は受けた衝撃を何とか表に出さないようにした。

「なるほどね……、そりや残念だな。あのまま魔術が使えるようになってたら、鉄を金にでも変えて億万長者にでもなれたのにな」

蒼空は冗談っぽくそう言った。つい先日放送されていた錬金術師が主人公のアニメのことを思い出しながら。

「……、アルスIIマグナ純金の変換はできるけど——今の素材で道具を用意するとこの国のお金だと……えっと、七兆円ぐらいかかるかも」  
「意味ねえ……」

そもそも億万長者でなくては鉄を金に変えるなんて事はできないらしい。

蒼空と上条の魂の抜けた眩きに、インデックスも弱々しく笑って、

「……だよ。たかが鉛を金に変換したって貴族を喜ばせる事しかできなもんね」

「けど、あれ？ 冷静に考えてみたら、それって何なの？ どういう原理？ 鉛を金に換えるって、まさか鉛と金の原子を組み替えるって、え？」

上条は頭にはてなマークを複数浮かべる。

「そこら辺を『魔力』だかなんだかでどうにかすんのが魔術なんじゃないの？」

「よくわかんないけど、たかが十四世紀の技術だよ？」

「ばっ……て事はアレか？ 原子配列変換って事でオツケーなの!？」

加速器使わなくても陽子崩壊起こせて馬鹿でかい原子炉なくても核融合を引き起こせるってか!? ちよつと待て、そんなの学園都市でも八人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>だつてできるかどうか分かんねーぞ!」

上条は蒼空の方をチラツと見ながらインデックスを捲し立てる。

確かにそんな事は蒼空でも無理だ。そもそも原子に働きかけるような能力でなければ不可能だが、例えそういう能力でもそれ程までの規模ならば『超能力者』は确实だろう。

「待て、そんな不思議そうな顔すんな! えつと、えつと、あー。お前それがどれだけスゴイ事かっつて言うとな、アトミックなロボとか起動戦士が普通に作れちゃうぐらいなんだぞ!?!」  
「なにそれ?..」

男のロマンは一言で斬り捨てられた。

## 15話 奇術師は終焉を与える《5》

男のロマンは一言で斬り捨てられた。

ぐったりとうな垂れる上条に、何故だかインデックスはとても悪い事をした気持ちになる。

「と、とにかく、儀式で使う聖剣や魔杖を今の素材で代用するって言っても、限界があるんだよ？ ……特に神殺しの槍、ヨセフの聖杯、ロンギヌスゴルゴダの十字架なんていう神様関連の聖具なんかは1000年経っても代用不可能らしいんだか…痛ッ…」

「お、おい、大丈夫か？」

興奮して一気にまくし立てようとした彼女は、二日酔いみたいにくめかみを押さえた。そんなインデックスに上条が心配そうに近づく。

蒼空は布団の中にいるインデックスの顔を見る。

10万3000冊もの魔道書。たった一冊読んだだけで発狂するようなそれを、それこそ一字一句正確に頭に詰め込んでいくという作業は、一体彼女にどれだけの苦痛を与えるんだろうか？

なのに、インデックスはたった一言も苦痛を訴えない。

「私の抱えている事情、知りたい？」

と彼女は言った。自分の痛みなど無視して、まるで蒼空達に謝るように。

上条は、覚悟を決めるように、答えた。



「なんていうか、それじゃこつちが神父さんみてーだな」  
「ま、ここまで来たら俺らも引き下がれないからな。最後まで巻き込  
んでくれよ」

そんな蒼空達の言葉に、インデックスは嬉しさを噛み締めるように  
小さく笑った。

そして、なんでだと思う？ とインデックスは言った。

「十字教なんて元は一つなのに、カトリック プロテスタント 旧教と新教、ローマ正教、ロシア成  
教、イギリス清教、ネストリウス派、アナスタシウス派、グノーシス  
派。どうしてこんなに分かれちゃったんだと思う？」

「そりゃあ……」

たとえ流し読みでも歴史の教科書を読んだ事がある上条なら何と  
なく答えは分かる。だが、それを『本物』のインデックスの前で口  
出すのは少し気が引けた。

「宗教に政治を混ぜたから、だろ？」

そんな上条を他所に、蒼空が答える。

「うん。分裂し、対立し、争い合つて——ついには同じ神様を信じる人  
さえ『敵』になつて。私達は同じ神様を信じながら、バラバラの道を  
歩く事になつた」

もちろん考えは色々ある。神様の言葉でお金を稼げると思った者、  
それを許せないと思った者。自分が世界で一番神様に愛されている  
と思つた者、それを許せないと思つた者。

「……交流を失った私達は、それぞれが独自の進化を遂げて『個性』を手に入れたの。国の様子とか風土とか——それぞれの事情に対応して、変化していったんだよ」

小さく息を吐いて、

「ローマ正教は『世界の管理と運営』を、ロシア成教は『非現実オカルトの検閲と削除』を。そして私の属するイギリス清教は……」

インデックスはわずかに言葉を詰まらせた。

「イギリスは、魔術の国だから」

それが、苦い思い出のように、

「……イギリス清教は魔女狩りや異端狩り、宗教裁判——そういう『対魔術師』用の文化・技術が異常に発達したんだよ」

首都ロンドンには今でも魔術結社を名乗る『株式会社』がいくつもあるし、書類上だけの幽霊会社ならその十倍以上存在する。元々は『街に潜む悪い魔術師』から市民を守るためだったはずの試行錯誤は、いつしか極めすぎて『虐殺・処刑の文化』にまで発展してしまった。

「イギリス清教にはね、特別な部署があるんだよ」

まるで自分の罪でも告白するように、インデックスはそつと言った。

「魔術師を討つために、魔術を調べ上げて対抗策を練る。必要悪ネセサリーの教会」

まさしく、シスターのように。

「敵を知らなければ敵の攻撃を防げない。だけど、汚れた敵を理解すれば心が汚れ、汚れた敵に触れば体が汚れる。だから『汚れ』を一手に引き受ける必要悪の教会が生まれた。そして、その最たるものが……」

「10万、3000冊ってか」  
「うん」

上条の言葉にインデックスは小さく頷き、

「魔術っていうのは式みたいなモノだから。上手に逆算すれば、相手の『攻撃』を中和させる事もできるの。だから私は10万3000冊を叩き込まれた。……世界中の魔術を知れば、世界中の魔術を中和できるはずだから」

その目的は上条の右手が持つ力に似ていた。そこに辿り着くために、インデックスは地獄をみつづけてきた。

「けど、魔道書なんてヤバイモン、場所が分かってんなら読まずに燃やしちまえば良いじゃねーか。魔道書を読んで学ぶヤツがいる限り、魔術師は無限に増え続けんだろ？」

「……重要なのは『本』じゃなくて中身だから。原典を消しても、それを知ってる魔術師が弟子に伝え聞かせちゃったら意味がないの」

そういう人間は魔術師じゃなくて魔導師っていうんだけどね、とインデックスは言う。

ネットみたいなものか、と蒼空達は思う。一度データが流れたら元を消してもコピーにつぐコピーでどんどん広まってく。

そうになるとデータを完全に消すというのは、ほぼ不可能に近い。

「それに、魔道書はあくまで教科書だから。……それを読み取っただけでは魔術師とは呼べない。そこから自分なりのアレンジを加え、新たな魔術を生み出してこそその魔術師なんだよ」

(なるほど。データじゃなくてウイルスってか)

ウイルスを完全に消滅させるには、ウイルスを解析して常にワクチンを作り続けるしかない。

「……それに、さつきも言ったけど。魔道書は危険だから」

インデックスは目を細めて、

「写本の処分さえ、専門の異端審問官インクジシヨナーは両目を糸で縫って脳の『汚染』を防ぐ——それでも五年は洗礼を続けないと『毒』は抜け切らないけど。原典にいたっては人の精神では無理。世界中に散らばる10万3000冊は、どうしようもないからこそ『封印』するしか道がなかったんだよ」

まるで大量に売れ残った核兵器みたいな扱いだった。

いや、実際まさにそうなんだろう。おそらく書いた本人だって予想外だったに違いない。

「チツ。それにしたって、魔術ってな『超能力者おれたち以外の普通の人間』なら誰でも使えるモンなんだろ？ だったらあつという間に世界中に広まっちゃうじゃねーか」

上条は舌打ち混じりにそう言って、ステイルの炎を思い出す。世界

中のみんながみんな、あんな力を使えるようになったら。もう科学を土台にしている世界の常識そのものが崩れてしまうような気がする。

「それは……平気。魔術結社の連中も、無闇に魔道書を外へは持ち出さないから」

「？ 何でだよ？ 連中にしたら、戦力は多いに越した事ねーだろ？」

「そりゃそーだけど、世の中の人間皆仲良しなんて事はないでしょうよ」

「……」

魔術を知っているからと言って、みんながみんな仲間だという訳ではない。

むしろ自分達の切り札の威力を知ってるからこそ、無闇に『敵の魔術師』を作りたくない。

まるで最新兵器の設計図みたいな扱いだった。

「ふうん。大体分かってきた」

上条は言葉を噛み締めるように、

「つまり、アレか。連中はお前の頭ん中にある爆弾を手に入れたいて訳なんだな」

世界中にある10万3000冊もの原典、それを記憶の中で完全に複製した写本の図書館。それを手にする事は、つまり世界中の魔術の全てを手に入れる、という意味だ。

「……、うん」

死にそうな、声だった。

「10万3000冊は、全て使えば世界の全てを例外なくねじ曲げる事ができる。私達は、それを魔神と呼んでいるの」

魔界の神、という意味ではなく、魔術を極めすぎて、神様の領域にまで足を突っ込んでしまった人間という意味の、魔神。

「世界の全てをか……、とんでもねーな」

蒼空がつぶやく。上条はそんな蒼空の声を、音だけ拾って。

……ふざけやがって。

上条は知らず知らずの内に奥歯を噛み締めていた。インデックスの様子を見ればわかる、彼女だって好き好んで10万3000冊を頭に叩き込んだ訳ではない。上条はステイルの炎を思い出す。彼女は少しでも犠牲者を減らすために、ただそれだけのために生きてきたつというのに。

その気持ちを逆手に取る魔術師も気に食わなければ、そんな彼女を『汚れ』と呼ぶ教会も気に食わなかった。どいつもこいつも人間をモノみたいに扱って、インデックスはそんな人間ばかり見てきたはずなのに。それでも他人の事ばかり考えている少女が一番気に食わなかった。

「……、ごめんね」

何に対してイライラしているのか、上条は自分の事なのに全く分からない。

ただ、その一言で上条当麻は本当に、キレた。

パカン、と軽くインデックスのおでこを叩く。

「……ぎっけんなよテメエ。そんな大事な話、何で今まで黙ってやがった」

犬歯を剥き出しにして病人を睨みつける上条に、インデックスの動きが凍りついた。何かとてつもない失敗をしたように両目を見開いて、唇が何かを呟こうと必死に動く。

「だって信じてくれると思わなかったし、怖がらせたくなかったし、その……あの」

ほとんど泣き出しそうなインデックスの言葉はどんどん小さくなっていき、最後の方はほとんど聞こえなかった。

それでも、きらわれたくなかったから、という言葉が蒼空と上条の二人は聞いてしまった。

「ふ、ふぎっけんなよ。ぎっけんなよテメエ!!」

ブチリという音が確かに聞こえた。

「ナメた事言いやがって、人を勝手に値踏みしてんじゃねえ！ 教会の秘密？ 10万3000冊の魔道書？ 確かにスゲエな、とんでもねー話だったし聞いた今でも信じらんねえような荒唐無稽なお話だよ」

だけども、と上条はそこで一拍置いて、

「たった、それだけなんだろう？」

上条の言葉に、インデックスの両目が見開かれた。

その小さな唇は何かを呟こうと必死に動くが、言葉は何も出てこない。

「見くびってんじゃねえ、たかだか10万3000冊を覚えた程度で気持ち悪いとか言うと思ってるのか！ 魔術師が向こうからやってきたらテメエを見捨ててさっさと逃げ出すとでも考えてたのか？ ざっけんなよ。んな程度の覚悟ならハナからテメエを捨てたりしてねーんだよ！」

上条は口に出しながら、ようやく自分が何にイラついているのかを理解した。

上条は単にインデックスの役に立ちたかった。これ以上傷つくのを見たくなかった、それだけだった。なのに、彼女は上条や蒼空の身を庇おうとしても、守ってもらおうとはしない。たったの一度さえ、上条は『助けてくれ』という言葉聞いた事がない。

それが、悔しい。

とてもとても、悔しい。

「……ちったあ俺達を信用しやがれ。人を勝手に値踏みしてんじやねーぞ」

たったそれだけの事。たとえ右手がなくても、ただの一般人でも、上条には退く理由がない。



「そーいう事。上条は<sup>コイツ</sup>どうしても誰かを助けたい病気みたいなもんだから。遠慮なんか必要ないぞ」

インデックスはしばらく呆けたように上条の顔を見上げていたが、ふえ、と。いきなり、目元にじわりと涙が浮かんだ。

嗚咽を殺そうと引き結んだ唇が耐えられないようにむずむず動いて、口元まで引き上げた布団にインデックスは小さく噛み付いた。そうでもしなければ幼稚園児みたいに大声で泣き出すと思うほど、インデックスの目元に浮かんだ涙がみるみる巨大になっていく。

それはきつと、今この瞬間の言葉に対するモノだけではないだろう。今まで溜め込んできた何かが、上条の言葉を引き金にして溢れ出てきた。

ようやくインデックスの『弱さ』を見れたような気がして、少し嬉しい。しかしこのまま女の子の涙を見ていつまでも喜んでいられない。

とうとうか、超気まずい。

蒼空からは「なんで嬉しそうな顔してんの？」的 なちよつと冷たい視線を向けられるし、何も知らない小萌先生が今入ってきたら、迷わず断罪<sup>シッネ</sup>と言われる気がする。

「あ、あーっ、あれだ。ほら、俺ってば右手があるから魔術師なんざ敵じゃねーしー!」

「……、けど、ひっく。夏休みの、補習があるって言った」

「……………言ったっけ?」

「絶対言った」

10万3000冊を一字一句覚える女の子は記憶力が抜群だったらしい。

「いいんだよ補習なんて。学校だって進んで退学者を出したい訳じゃない、補習をサボったら補習の補習があるだけさ」

よく担任の先生の家の中でそんな事が言えるな、と蒼空は思ったがまあ今は放っておく。

「……じゃあ、何だって早く補習に行かなきゃとか言ってたの？」

「……、あー」

上条は思い出す。あの時はインデックスの修道服『歩く教会』を幻想殺しでぶっ壊して素っ裸にした直後で、非常にいたたまれなかった。

「いえそのー……、時雨くんに任せておけば大丈夫かなー、なんて思ってたー……」

「私がいると……居心地、悪かったんだ？」

「……」

「悪かったんだ」

涙目でもう一度言われたとあつてはごまかし切る事は到底不可能だった。

上条当麻は勢い良く土下座モードへと移行。

インデックスはまるでゾンビのようにゆらゆらと体を揺らしながら立ち上がると、両手で上条の左右の耳を掴んで、巨大なおにぎりにでもかぶりつくように頭のとっぺんに思いっきり噛み付いた。

## 16話 奇術師は終焉を与える《6》

小萌先生のボロアパートから600メートルほど離れた、雑居ビルの屋上で、ステイルは双眼鏡から目を離した。

「禁書目録に同伴していた少年達の身元を探りました。……禁書目録は？」

ステイルはすぐ後ろまで歩いてきた女の方も振り返らずに答える。

「生きてるよ。……だが生きてるとなると向こうにも魔術の使い手がいるはずだ」

女は無言だったが、誰も死ななかつた事に安堵しているように見える。

腰まで届く長い黒髪をポニーテールにまとめ、腰には『令刀』と呼ばれる日本神道の雨乞いの儀式などで使われる、長さ2メートル以上もある日本刀が鞘に収まっている。

左脚の方だけ何故か太股の根元からばつさり斬られたジーンズに、ヘソが見えるように脇腹の方で余分な布を縛った白い半袖のTシャツ。脚にはヒザまであるブーツ、日本刀は腰にある革のベルトに挟むようにぶら下げてある。

ステイルと同様に、とてもまともな格好とは思えない。

「それで、神裂。アレは一体何なんだ？」

「……少なくとも魔術師や異能者といった類ではない、とだけ」

「何だ、もしかしてアレがただの高校生とでも言うつもりかい？」

ステイルは口に唾えて引き抜いた煙草の先を睨んだだけで火をつける。

「……………やめてくれよ。僕はこれでも現存するルーン二四字を完全に解析し、新たに力のある六文字を開発した魔術師だ。何の力も持たない素人が、裁イノケンティウスきの炎を退けられるほど世界は優しく作られちゃいない」

いくら禁書目録の助言があつたとしても、それを即座に応用し戦術に練り上げる思考速度。さらに正体不明の右手。アレがただの一般人ならまさしく日本は神秘の国だ。

「ではもう一人の少年が関係しているのかもしれないね」

「白髪の方が？」

「ええ、彼はこの学園都市の頂点に立つ超能力者の一人だそうです」

この学園都市は超能力者量産機関という裏の顔を持つ。

統括理事会に、ステイルや神裂は禁書目録の事を伏せるとはいえ、事前に連絡を入れて許可を取っていた。名実ともに世界最高峰の魔術グループでさえ、敵の領域では正体を隠し続ける事は不可能だと踏んだからだ。

「超能力者…………、どんな能力か分かったのか？」

「空間移動らしき能力を持つと記されていましたが…………」

右手ではなく、白髪の少年の能力が関係しているのかと考えたが、それだと『魔女狩りの王』を打ち消した現象を説明できない。

「情報の…………意図的な封鎖、かな。しかも禁書目録の傷は魔術で癒し

たときた。神裂、この極東には他の魔術組織が実在するのかい？」

ここで彼らは『統括理事会とは異なる何らかの組織を味方につけている』と踏んだ。

他の組織が、蒼空達の情報を徹底的に消して回っていると勘違いしたのだ。

「未知数の戦力に対してこちらの増援はナシ。難しい展開ですね」

それはまさに勘違いだった。上条の幻想殺しは『異能の力』を相手にしない限り効果はゼロ。不幸な上条当麻は、『どんな異能の力も打ち消す』というとんでもない右手を持っているが、学園都市の身体検査に使う測定機械ではチカラを測る事ができない。よって、上条当麻は悲しい事に無能力者扱いなのである。

蒼空に関しては上条とはまた別の理由で、神裂はその正確な情報を手に入れる事ができなかった。蒼空の能力の詳細は、魔術師とはいえ外部からやってきた人間程度の情報レベルでは調べる事はできなかったのだ。

「最悪、組織的な魔術戦に発展すると仮定しましょう。ステイル、あなたのルーンは防水性において致命的な欠点を指摘された、と聞いていますが」

「その点は補強済みだ。刻印はラミネート加工した。同じ手は使わせない」

まるで手品師のように刻印を取り出し、

「今度は建物のみならず、周囲二キロに渡って結界を刻む……使用枚数は16万4000枚、時間にして60時間ほどで準備を終えるよ」

現実の魔術はゲームのように呪文を唱えてハイおしまい、という訳にはいかない。

一見そう見えるだけで、裏では相当な準備が必要となる。ステイルの炎も本来は『10年間月の明かりを溜めた銀狼の牙で……』という代物なので、これでも達人レベルの速度と言える。

「……、楽しそうだよね」

と、不意にルーンの魔術師は双眼鏡も使わず、600メートル先を見て呟いた。

「楽しそう、本当に本当に楽しそうだ。あの子はいつでも楽しそうに生きている」

何か、重たい液体でも吐き出すように、

「……僕達は、一体いつまでアレを引き裂き続ければ良いのかな」

神裂はステイルの後ろから、600メートル先を眺める。

双眼鏡や魔術を使わなくても、視力8.0の彼女には鮮明に見える。何か激怒しながら上条の頭にかじりついている少女と、それを見て大笑いしている蒼空の姿が窓に映っている。

「複雑な気持ちですか？」

神裂は機械のように、

「かつて、あの場所にいたあなたとしては」

「君だってそうだろう。それに……、いつもの事だよ」

炎の魔術師は答える。まさしく、いつもの通りに。

## 17話 奇術師は終焉を与える 《7》

おつふろ♪ おつふろ♪ と蒼空と上条の間で、両手に洗面器を抱えたインデックスは歌っていた。

病人をやめました、と言わんばかりにパジャマから修道服に着替えていた。

あれから三日経って、ようやくあちこち出歩けるようになった彼女の願いが風呂だった。

ちなみに小萌先生のアパートには『風呂』などというなどという概念は存在しなかった。管理人室のモノを借りるか、アパート最寄りにあるポロっポロの銭湯へ行くという究極の二択しかなかった。

そんなこんなで、洗面器を抱えて夜の道を歩く。

「とうま、とうま」

上条のシャツの二の腕を甘く噛みつつインデックスはややくぐもった声で言う。噛み癖がある彼女にとって、どうやらこれは服を引っ張ってこっち向かせる、ぐらいのジェスチャーらしい。

「ジャパニーズ・セントウってフジャマでイレズミがコンヨクなんだよね!？」

「なんじゃそりゃ。色々混ざりすぎだな」

インデックスの銭湯のイメージは、聞きかじった知識が色々混じっているようだ。



「じゃあじゃあ、コーヒー牛乳は？ こもえが言ってた。カップチーノみたいなもの？」

「そんなオシヤレなもんじゃないぞ」

どうやらインデックスは随分とテンションが上がっているらしい。あんまり期待を膨らませるな、と上条は言う。

「まあまあ、良いじゃないの。インデックスにとっては銭湯みたいなデカイ風呂はかなり珍しいんじゃないの？」

イギリスではホテルにあるユニットバスがメジャーなのではないながら、蒼空は言う。

「んー？ その辺は良く分かんないかも」

インデックスは本当に良く分からないという感じで小さく首を傾げた。

「私、気がついたら日本にいたからね。向こうの事はちよつと分からないんだよ」

「へー」

「……ふうん。何だ、どうりで日本語ぺらぺらなはずだぜ。ガキの頃からこつちにいたんじゃない、お前ほとんど日本人じゃねーか」

それだと、『イギリス教会まで逃げ込めば安全』という言葉の方が微妙になってくる。てつきり地元に戻るのかと思いきや、実はまだ見た事もない異国に出かける訳だ。

上条の言葉を蒼空が否定しようとしたが、

「あ、ううん。そういう意味じゃないんだよ」

その前にインデックスが長い銀髪を左右に流すように首を降つて否定した。

「私、生まれはロンドンで聖ジョージ大聖堂の中で育ってきたらしいんだよ。どうも、こっちにきたのは一年ぐらい前から、らしいんだよ」「らしい?」

蒼空が曖昧な言葉に思わず眉をひそめた所で、

「うん。一年こっちにきたときぐらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスは、笑っていた。

まるで、生まれて初めて遊園地にやってきた子供のように。

その笑顔が完璧だからこそ、その裏にある焦りや辛さが見て取れた。

「最初に裏路地で目を覚ました時は、自分の事も分からなかった。だけど、とにかく逃げなきゃって思った。昨日の晩ご飯も思い出せないのに、魔術師とか禁書目録とか必要悪の教会とか、そんな知識ばかりぐるぐる回ってて、本当に怖かった……」

「……じゃあ。どうして記憶をなくしちゃったかも分かんねーって訳か」

うん、という答え。上条だつて心理学はサツパリ分からないが、ゲームやドラマじゃ記憶喪失の原因なんて大体二つに限られてくる。

記憶を失うほどのダメージを頭に受けたか、心の方が耐えられない記憶を封印しているか。

(記憶喪失か……)

記憶を失ったインデックスと前世の記憶があつた蒼空。二人の身に起こった事は反対の事だが、同じ『記憶』に関するという点で蒼空もインデックスの事情に関して思う所がある。初めは自分も前世の記憶に戸惑ったものだが、インデックスは今までの記憶を失い気づいたら知らない場所に一人、その恐怖は想像し難い。

上条の方に目を向けると、分かりやすく拳を握り締めていた。

「むむ？　とうま、なんか怒ってる？」

インデックスも、そんな上条の様子に気づいたようだ。

「怒ってねーよ」

ギクリとしたが、上条はシラを切った。

「なんか気に障ったなら謝るかも。とうま、なにキレてるの？　思春期ちゃん？」

「……その幼児体型にだきや思春期とか聞かれたくねーよな、ホント」  
「む。何なのかなそれ。やっぱり怒っているように見えるけど。それともあれなの、とうまは怒ってるふりして私を困らせてる？　とうまのそういう所は嫌いかも」

「あのな、元から好きでもねーくせにそんな台詞吐くなよな。いくら何でもお前にそこまでラブコメいた素敵イベントなんぞ期待しちやいねーからさ」

「……」

「て、アレ？　……何で上目遣いで黙ってしまわれるのですか、姫？」  
「……」

超強引にギャグに持っていこうとしてもインデックスはまるで反応してくれない。

おかしい、なんか変だ。何でインデックスは胸の前で両手を組んで、上目遣いの目尻に涙が浮かびそうな傷ついたっぽい顔をして、あまつさえちよつと甘く下唇を噛んでいるんだろう？

「どうも」

はい、と上条は名前を呼ばれたのでとりあえず返事を返してみる。

とてつもなく不幸な予感がした。最後の望みとして、蒼空の方に視線を向けるが、蒼空はニツコリと笑っているだけ。

「だいつきらい」

瞬間、上条は女の子に頭のとっぺんを丸かじりされるといふレアな経験値を手に入れた。

(学習しねーヤツ)

## 18話 奇術師は終焉を与える《8》

インデックスは一人でさっさと銭湯へ向かってしまった。

置いていかれた蒼空と上条の二人は、トボトボと銭湯を目指していた。インデックスの後を追いかけてしようとしたが、お怒りのシスターは上条が近づくなり猫のように威嚇して、走り去ってしまい、先へ行ってしまった。

まあ目的地が同じだから、いつか合流できるか、と追いかけるのは止めたのだった。

「英国式シスター、ねえ」

上条は暗い夜道を歩きながら呟いた。

「急にどした？」

「いや何か、色んな意味で凄いヤツだなんて」

夏休みの初日、朝起きるとベランダに引っかかっていた少女。蒼空はベランダに引っかかっていたところを目撃した訳ではないが、初っ端から衝撃的なその出会いは上条と蒼空の常識を塗り替えた。

このままインデックスを日本の『イギリス教会』に連れて行ったら、彼女はそのままロンドンの本部へ飛ぶ。もう上条達の出番はない。短い間だったけどありがとう、君達の事は忘れないよ、完全記憶能力もあるし、的なオチになるだろう。

何か胸にチクリと刺さるものがある上条だったが、かと言って何か別案がある訳でもない。インデックスを教会に保護してもらわなけ

れば延々と魔術師に追われ続ける事になるし、インデックスの後を追ってイギリスまで飛ぶというのも非現実的だ。

住んでる世界、立つてる場所、生きてる次元——何もかもが違う人間。

蒼空と上条は科学の世界に住んでいて、インデックスは魔法の世界に生きていて、

二つの世界は、陸と海のようにハッキリ別れていて、交じり合う事はない。その事実が、何故か喉に刺さった魚の骨みたいにイライラさせ

「——なあ、カミヤん」

少し低いトーンの蒼空の声が、上条の空回りする思考を切った。

「つと、どうした時雨？」

「ここら辺、違和感が……なんか、おかしくねーか？」

根拠はないが、直感的に違和感を蒼空は感じ取った。

その直感を信じて、蒼空は周囲を回す。目に付いたのはデパートの電光掲示板の時計だった。時計が示す時間は午後八時ジャスト。

「人がいない……？」

上条が呟く。

その呟きの通り、蒼空と上条以外の人がいない。いくら学園都市といえど、まだまだ人が眠る時間でもないはずなのに、辺りが夜の森み

たいに酷く静まり返っている。

そう言えばインデックスと一緒に歩いていた時から、誰ともすれ違っていない……？

蒼空と上条は首をひねりつつも、そのまま歩き続ける。さつきよりも少し早足で。

そして、片側三車線の大通りに出た時、違和感は明確な『異常』に進化した。

誰もいない。

コンビニの棚に並ぶジュースみたいにずらりと並ぶ大手デパートには誰も出入りしていない。いつも狭いと感じる歩道はやけにだだっ広く感じられ、まるで滑走路みたいな車道には車の一台も走っていない。路上駐車してある車はそのまま乗り捨てられたように無人。

まるでひどい田舎の農道でも見ているようだった。

「ステイルが人払いの刻印<sup>ルーン</sup>を刻んでいるだけですよ」

ゾン、と。いきなり顔の真ん中に日本刀でも突き刺されたような、女の声。

気づけなかった。

その女は物陰に隠れていた訳でも背後から忍び寄ってきた訳でもない。蒼空と上条の行く手を遮るように、10メートルぐらい先の、滑走路のように広い三車線の車道の真ん中に立っていた。

暗がりで見えなかったとか気がつかなかったとか、そんな次元ではない。確かに、一瞬前まで誰もいなかった。だが、たった一度瞬きした瞬間、そこに女は立っていたのだ。

（空間移動？ 能力者……いや、なら気づけるはずだ。今の俺達の状況を考えたら似たような事ができる魔術師、って感じか）

蒼空は考えを巡らせながらも、得体の知れない女に意識を集中させる。

「この一帯にいる人に『何故かここには近づこうと思わない』ように集中を逸らしているだけです。多くの人は建物の中でしょう。ご心配はなさらずに」

理屈よりも体が——無意識に上条の右手に全身の血を集まっていた。ギリギリと手首をロープで縛られるような痛みにも、上条も直感的にコイツはヤバイと感じ取った。

女はTシャツに片脚だけ大胆に切ったジャージという、まあ普通の範囲の服装ではあった。

ただし、腰から拳銃のようにぶら下げた長さ2メートル以上もの日本刀が凍える殺意を振りまいていた。刀身は鞘に収まって見えないが、まるで古い日本家屋の柱みたいな歴史を刻んだ漆黒の鞘が、すでに『本物』を裏付けていた。

「神浄の討魔、ですか——良い真名です」

そのくせ本人は緊張した様子を見せない。まるで世間話のような気楽さが、かえって怖い。



(神浄の討魔……？ カミヤんの事か？)

「……、テメエは誰なんだよ」

「神裂火織、と申します。……できれば、もう一つの名は語りたくないのですが」

「もう一つ？」

「魔法名、ですよ」

ある程度予想していたとはいえ、上条は思わず一步後ろへ下がった。

魔法名——ステイルが魔術を使って上条達を襲った時に名乗った『殺し名』だ。

「て事は、アンタもステイルと同じ魔術結社とかいう奴らの一人って事ね」

上条とは反対に、蒼空は一步前に出て言った。

「……？」

神裂は一瞬だけ不審そうに眉をひそめ、

「ああ、禁書目録に聞いたのですね？」

魔術結社。10万3000冊の魔道書を欲して、インデックスを追い回す『組織』。魔術を極め、世界の全てをねじ曲げると言われる、『魔神』と呼ばれる人間に辿り着く事を望む『集団』。

「率直に言って」

神裂は片目を閉じて、

「魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

ゾツとした。

超能力者の蒼空でも、幻想殺しという切り札を持つ上条でも、目の前の敵に思わず悪寒を覚えた。

「保護、ねえ……嫌だ、って言ったら？」

それでも、蒼空は言った。上条もそれに応えるように神裂を睨み、右手の拳を握る。

「仕方ありません」

神裂はもう片方の目も閉じて、

「名乗ってから、彼女を保護するまで」

ドン!! という衝撃が地震のように足元を震わせた。

まるで爆弾でも爆発したようだった。視界の隅で、蒼い闇に覆われたはずの夜空の向こうが夕焼けのようなオレンジ色に焼けている。どこか遠く——何百メートルも先で、巨大な炎が燃え広がっているのだ。

「イン、デックス……ッ!!」

敵は『組織』だ。そして上条は炎の魔術師の名前を知っている。

「カミヤんはインデックスの方に行け。コイツは俺が止めるから」  
「けど——!!?」

瞬間、神裂火織の斬撃が襲いかかってきた。

蒼空達と神裂の間には10メートルもの距離があった。加えて、神裂の持つ刀は2メートル以上の長さがあり、女の細腕では振り回す事はおろか鞘から引き抜く事さえ不可能に見えた。

——、はずだった。

なのに、次の瞬間。巨大なレーザーでも振り回したように蒼空達の頭上スレスレの空気が引き裂かれた。さらに蒼空達のすぐ後ろ——斜め後ろにある風力発電のプロペラが、まるでバターでも切り裂くように音もなく斜めに切断されていく。

「やめてください」

10メートル先で、声。

「私から注意を逸らせば、辿る道は絶命のみです」

すでに神裂は2メートル以上ある刀を鞘に収めている。あまりに速すぎて蒼空達の目には刀身が空気に触れた所さえ見る事ができなかった。

蒼空達は動けなかった。

自分が今ここに立っているのは、神裂がわざと外したから——かろうじてそう思うのが精一杯で、それさえ現実味が湧いてこない。

ドズン、と音を立てて蒼空達の後ろで切り裂かれた風力発電のプロペラが地面に落ちた。

「……、ッ！」

「マジかよ……」

あまりの切れ味に上条は思わず奥歯を噛み締める。蒼空も乾いた眩きを漏らすだけ。

神裂は、閉じていた片目をもう一度開いて、

「もう一度、問います」

神裂はわずかに両の目を細め、

「魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

神裂の声には、よどみがない。

まるで、この程度の事で驚くなど言わんばかりの、冷たい声だった。

「……カミヤん、インデックスの方は任せた」

もう一度、蒼空はそう言って、今度は上条の返事を待たずに上条を爆発のあつた方へ転移させた。

## 19話 奇術師は終焉を与える《9》

今度は上条の返事を待たずに上条を爆発のあつた方へ転移させた。ステイルならばもう技のタネが分かっているし、蒼空の能力よりも上条の右手の方が相性が良い。逆に武器を持っている神裂は上条との相性が悪いと判断したからだ。

神裂は上条がいきなり目の前から消えた事に、細めていた目を僅かに見開く。

「超能力、ですか。あなたは学園都市が誇る超能力者の一人だそうですが、それでもあなた一人で私をどうにかできるとでも？」

「……さあ、やってみないと分かんないな」  
「そうですか」

淡々とした口調。一切の感情を感じさせない声音で神裂は応えた。

瞬、とほんの一瞬だけ、何かのバグみたいに神裂の右手がブレて、消える。

轟！ という風の唸りと共に、恐るべき速度で何かが襲いかかってきた。

まるで四方八方から巨大なレーザー銃を振り回されるような感覚。

それは、例えるなら真空刃で作り上げた巨大な竜巻。

蒼空を台風の目にして、地面が、街灯が、一定の間隔で並ぶ街路樹が、まとめて切り裂かれた。宙を舞った握り拳ほどもある地面の欠片が蒼空の頬を掠める。

視線だけで周囲を見回す。

一本。二本、三本四本五本六本七本——都合七つもの直線的な『刀傷』が平たい地面の上を何十メートルに渡って走り回っていた。

チン、と刀が鞘に収まる音。

「まるで反応できていないようですが」

神裂はその先を言葉にしなかったが、「その程度でどうにかできるとでも？」という続きの台詞が言外に伝わって来るようだった。

(コイツ……)

神裂の言葉に蒼空は内心苛立ちを見せるが、しかし実際問題神裂が何をやったのか、まるで分からなかった。

「何度でも、問います。私は、魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」

右手を刀の柄に触れたまま、神裂は憎悪も怒りもなく、本当にただの『声』を出した。

七回。たった一度の斬撃さえ見えなかったのに、あの一瞬で七回もの『居合い切り』を見せた。それも、その気になれば七回が七回とも蒼空の体を両断できる、必殺の七回。

(けど、刀が収まる音は一回だけ。これも魔術の力か?)

加えて、2メートル以上もの刀身とはいえど、この距離まで届くと

は思えない。たった一度の斬撃の射程距離を何十メートルにも引き伸ばし、たった一度刀を抜いただけで七つの太刀筋を生むような『魔術』があるのだ。

「私の七天七刀が織り成す『七閃』の斬撃速度は、一瞬と呼ばれる時間に七度殺すレベルです。人はこれを瞬殺と呼びます。あるいは必殺でも間違いではありませんが」  
「そうですか……」

蒼空の姿が神裂の視界から消える。

「ならまずはその刀をどうにかしないと」

次に蒼空の声が聞こえたのは、神裂の背後からだった。その声に反応し、神裂は咄嗟に振り向く。それを見越していたかのように、蒼空は神裂が振り向くと同時にもう一度転移。

(奪<sup>と</sup>った！)

そのまま神裂の持つ刀に手を伸ばす。

蒼空の能力は人が身に付けているモノを、例えば今の状況ならば神裂の持つ刀だけを転移させるにはその刀自体に直接接触しなければ、刀のみを転移させる事はできない。

だから刀を奪って『七閃』とやらを無力化するには直接神裂の刀に触れる必要がある。

転移を用いた蒼空の動きは、常人では反応できないはずの速度だ。しかし蒼空の手が神裂の持つ日本刀に触れる前に、蒼空の体を衝撃が襲った。

ドバギ、と痛々しい音が聞こえた。

「かハッ……!!?」

強制的に肺の中の空気が吐き出された。肋骨の辺りを蹴り飛ばされた蒼空はそのまま5メートルほど吹っ飛ぶ。

地面に体が叩きつけられる前に、蒼空は能力を使用。自身を転移させて距離をとり、ついでに体勢も立て直す。

「ぐっ……、げホッ」

その一連の動作を終えたところで、ようやく痛みが遅れてやって来た。身体の芯を震わすような痛み。嫌でも呼吸が荒くなる。

（ただの蹴り……、だよな？ なんつー威力だよ）

神裂は女性にしてはかなり長身だが、それでもあれほどの威力の蹴りが女性に出せるとは思えない。というか性別など関係なく、ありえない威力の蹴りだった。しかも咄嗟の、体勢も不完全な蹴りで。

（肉体強化の魔術でもあんのか……？ なんでもありじゃねーか）

「今の感触、骨が折れているはずですよ。まだ続けますか？」

神裂は至って冷静だ。さっきまでと全く同じ声のトーンでそう言った。蒼空の能力など恐るるに足らないという事だろうか。

神裂の声を聴きながら、蒼空は能力を自身の体に用いる。確かに、骨が折れている。



能力で折れた骨を、骨が折れていなかった時まで時間を巻き戻す。蹴りによる痛みという感覚は消えないが、物理的なダメージは無くなった。

一度、深呼吸して荒い息を整えると、

「全然余裕だよ。まだ始まったばかりかだろーが」

神裂を挑発するように、蒼空は神裂に言い放った。

神裂はそんな蒼空の様子を見て、何も色がなかったその表情に、僅かに驚きの色が浮かんだ。

蹴った時の感触からして、肋骨が何本か折れたはずだ。肋骨が折れているとなると呼吸をする度に体に痛みが走る。とても平然と体を動かせるような怪我ではないはずだ。

まさかこの一瞬で治療した、とでも言うのか、と。

「……」

神裂は今までの蒼空の行動を頭の中で整理する。まずは空間移動の能力、これは事前に調べた情報にもあった能力。そして再生、もしくはは治癒の能力。

学園都市の能力開発はこうも進んでいるのか、と神裂は驚愕と感心が混じったような感情を抱きつつ、刀の柄を握る。

油断はしない。

神裂の右手がブレる。

——七閃。

今度は牽制ではない。殺しはしない、が確実に体の自由を奪うつもりで放つ一撃。

蒼空の目は神裂が何をしたのかを映してはいない。ただ風の唸りと共に、恐るべき速度で何かが襲いかかってくる事はもう分かっていた。

瞬間、蒼空の周囲の地面が抉られ、砂埃が舞い上がる。

同じように転移で攻撃を躲して、攻撃を仕掛けて来るかと予想していたが、その気配はない。

数秒後、砂埃が晴れていく。

「な……!?!」

今まで感情の変化を見せなかった神裂が、初めて目に見えて驚きを顔に浮かべた。

神裂の視線の先にいるのはもちろん蒼空。『七閃』を受けて倒れ伏しているはずの蒼空は、一つの傷を受けた様子もなく立っていた。そして、何より驚いたのは『七閃』によって砕かれた地面の瓦礫が、蒼空の周囲に不自然に浮いている光景だ。

「これ、<sup>ワイヤー</sup>鋼糸……か?」

真円の青い月の光に反射して、妖しく輝く七本の鋼糸。蒼空の体の

目の前で不自然に動きを止めたそれは、神裂の手から伸びていた。

「魔術師じゃなくて、マジシャン奇術師ってか」

あの馬鹿長い刀はただの飾りだったのだ。

刀を抜いた瞬間さえ見えないのも無理はない。そもそも神裂は刀を抜いていない。ほんのわずかに鞘の中で刀を動かして、再び戻す。その仕草で、七本の鋼糸を操る手を隠していたのだ。

「これは返すよ」

蒼空が手を払うように動かすと、鋼糸はまるで何かに押されるように神裂の元まで戻っていく。そして周囲に浮いていた瓦礫は道路の端に転移させた

「……どうやったのかは分かりませんが、安い七閃トリックを破ったくらいで得意にならないように。この七天七刀は飾りではありませんよ、七閃をくぐり抜けた先には真説の『唯閃』が待っています」

「へえ」

「それに何より——、私はまだ魔法名を名乗ってすらいません」

神裂は再び剣の柄を右手で握る。

「……」

要するに、まだまだ力を隠しているという事だろう。

(さてと、どうしたもんかな)

頭の中で今分かっている要素で戦略を組み立てる。

(とりあえず)

さつき道路の端に転移させた瓦礫を神裂の頭上に転移させる。

神裂の視界には入らない場所から転移させたが、神裂は難なく降り注ぐ瓦礫を躲す。

この程度は避けられて当然と考えていた蒼空は神裂が動いたその先へ、周囲の砕けたアスファルトの瓦礫を再び転移させる。

神裂は次は躲す事すらせず、降り注ぐいくつもの瓦礫を鞘に入ったままの刀をたった一振りしただけで、その全てを薙ぎ払った。

(まあそうですね。んじゃ次は)

自分の体を神裂の背後に転移させる。そのまま神裂の首を狙って蹴りを放つ。

「ワンパターンですよ」

神裂は姿勢を低くして蒼空の蹴りを躲し、流れるような動作で振り向きざまに左の拳で蒼空の顎を狙うカウンター。

しかしその拳は空を切る。視線の先には、再び転移で距離を取った蒼空の姿。

その姿を確認すると同時に神裂は地面を蹴り、一足飛びで蒼空の眼前、七天七刀の間合いまで肉薄する。

まずは至近距離での『七閃』。そして動作のフェイクではなく、七天

七刀を抜刀。蒼空の意識を確実に刈り取る、首筋への峰打ちを狙う。

「速えー……、マジで人間の動きかよ」

しかし、どの攻撃も蒼空には届いていなかった。先程の攻撃と同じように、蒼空に当たる前に不自然に空中で停まっている。

怪訝そうな顔をする神裂を見て蒼空は口を開く。

「俺の能力……、外部の人間ならせいぜい書庫の　俺の能力はさ、空間移動じゃなくて時間と空間に干渉して操る事ができるって能力なんだよね」

神裂の表情が驚愕に染まる。その驚きが蒼空の能力へ向けられたものだという事は誰が見ても明らかだ。

「それで俺は今、周りの時間の流れを限りなく遅くする力場みたいなものを発生させてんの。

その力場に触れた瞬間から俺に近づいてくるモノは限りなく遅くなった時間の流れに従う。

だからアンタの攻撃も停まったように見えてる訳。実際には動いてるんだけどな、分からないぐらいに超ゆっくりと」

蒼空が神裂の後ろへ転移すると、鋼糸と七天七刀は本来描くはずだった軌道をなぞった。

「だからこうして力場から離れると元の時間で動き出す。アンタもとんでもなく速いけど、コレは超電磁砲ぐらいなら余裕で……」

蒼空はそこで言葉を区切る。

「ま、俺の能力の話はいいとしてだ。それよりもさ、なんでアンタはずっと手加減してんの？」

蒼空は抱いていた疑問をぶつけた。

「んー……、手加減ていうか、殺す気じゃないよね。さっきのも峰打ちだったし」

しようと思えば最初の一撃で蒼空と上条共々、意識を奪う事が可能だったはずだ。でも、しなかった。先程の攻撃だって峰打ちだった。

「……。あなたこそ、なぜ彼女にそこまでするのですか？」

神裂は蒼空の問いには答えずに、質問で返してきた。

「質問を質問で……、まあいいや。別に、聞くほどの大した理由はねーよ」

上条のように目の前で困っている少女を放っておけないからなんて主人公らしい真つ直ぐでカッコイイ理由は持っていない。

ただ、神裂に背中を切られたって上条と蒼空を庇おうとしたインデックスに庇われっぱなしなのが性にあわないから、

そして、

「俺はちよつと上条<sup>ヒー</sup>当麻<sup>ロー</sup>の手助けをしたいだけだよ」

「……」

神裂は何も言わない。

「アンタの質問には答えた訳だし、ちゃんとこっちの質問にも答えて

もらおうか。アンタはあのステイルって奴とは違うらしい」

蒼空の目から見て、神裂は上条に近いように思える。敵にすら手加減して、それに何度も何度も「魔法名を名乗りたくない」と、聞いてきた。それはつまり、蒼空と上条を「殺したくない」と言っているという事だ。

何も言葉を返してこない神裂を見て、蒼空は言葉が続ける。

「なんなら俺なんかよりよっぽどまともな感性してるよ。そんな奴がさ、なんでインデックスにあそこまでするんだ？ 寄ってたかって追いついて、しまいいには背中切って。知らねーかもしれねえけどさ、イン<sup>ア</sup>デ<sup>イ</sup>ックスは記憶まで失ってんだぜ」

不治の病の子供のためとか、死んでしまった恋人のためでも良い。何か『望み』があつてインデックスを狙うなら、10万3000冊を手に入れて世界の全てを歪める(らしい)『魔神』になろうと言うなら、まだ分からなくもない。

けど、違う。

神裂は『組織』の一人だ。言われたから、仕事だから、命令だからインデックスを追っている。けど蒼空にはそんな一言で、一人の女の子を追い駆け回して背中を斬るような人間には思えない。

沈黙。

「……答えないならもういいけど。続きをするなら魔法名を名乗る事をオススメしとくぜ。俺も殺す気ですから」

そうやって蒼空は、頭の中でスイッチを切り替えようとした時だった。

「……私だって」

今まで沈黙を貫いていた神裂が口を開いた。

「私だって、本当は彼女の背中を斬るつもりはなかった。あれは彼女の修道服『歩く教会』の結界が生きていると思ったから……絶対傷つくはずがないから斬っただけ、なのに……」

「な……!?!」

神裂が発したのは衝撃的な台詞だった。

蒼空には神裂の言っている意味が分からない。

「私だって、好きでこんな事をしている訳ではありません。けど、こうしないと彼女は生きていけないんです。……死んで、しまっうんですよ」

神裂火織は、泣き出す前の子供みたいに言った。

「私の所属する組織の名前は、あの子と同じ、イギリス教会の中にある——必要悪の教会」

血を吐くように、言った。

「彼女は、私の同僚にして——大切な親友、なんですよ」



## 20話 魔道書は静かに微笑む《1》

神裂が発した言葉を、蒼空はすぐに飲み込む事ができなかった。だって、インデックスは魔術師に追われてイギリス教会に逃げ込もうとしたのに。後を追ってきた魔術師が同じイギリス教会の人間だった、なんて。

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えはありますか？」

神裂火織は言った。その声は弱々しく、とてもさっきまでの神裂火織と同一人物には見えない。それは、疲れきったただの女の子にしか見えなかった。

「あ、ああ……、だからインデックスは10万3000冊の内容を全部頭の中に記憶できてる、だろ。まあ言っちゃ悪いけど、そんなとんでも能力を持つてるようには見えねーがな」

「……、あなたには、彼女がどんな風に見えますか？」

「は？ あー……、多少変なところはあんだけど、まあ普通、なのか？」

神裂は驚きよりも、むしろ疲れたような表情をして、ポツリと言った。

「普通の女の子が、一年間も私達の追撃から逃れ続ける事ができると思えますか？」

「それは……」

「ステイルの炎に、私の七閃と唯閃——魔法名を名乗る魔術師達を相手に、あなた達のように異能に頼る事なく、私のように魔術にすぎることなく、ただ自分の手と足だけで逃げる事が」

神裂は自嘲するように笑い、

「たった二人で、これです。必要悪の教会という『組織』そのものを敵に回せば、私だって一ヶ月も保ちませんよ」

魔術師の力の基準は分からないが、ステイルや神裂のような魔術師が何人もいるとしたら。確かに、無理だろう。蒼空の能力ならばとにかく逃げに徹底すれば、あるいは可能かもしれない。しかし蒼空のような超能力も、上条のような右手も無しで、一年間魔術師の『組織』から逃げ回る。そんな所業をやつてのけるなら、確かにそれは天才と呼べるだろう。

「アレは、紛れもなく天才です」

神裂は、断言するように、

「扱い方を間違えば天災となるレベルの。教会が彼女をまともに扱わない理由は明白です。怖いんですよ、誰もが」

「……怖い、ねえ」

神裂の言葉に、少し昔の自分とインデックスの姿が重なった。生まれた時から強力な能力を持っていた蒼空は、幼少の頃に暗部の研究施設をたらい回しにされていた経験がある。そこでは蒼空の能力を研究していく中でその力に恐怖する者も少なからずいた。そして力を悪用しようとして命を狙ってくる輩もいた。

（お前らのために持って生まれた力じゃねーよなあ、インデックス）

「……それでもアイツは人間だろ。どんな理由があろうと道具扱いして良い理由にはなんねーだろ」

「そうですね」

神裂は頷く。

「……その一方で、現在の彼女の性能は凡人とほぼ変わりません」  
「……？」

「彼女の脳の85%以上は、禁書目録の10万3000冊に埋め尽くされてしまっているんですよ。……残る15%をかりうじて動かしている状態でさえ、凡人とほぼ変わらないんです」

確かにそれはすごい話だろうが、今はもつと先に知りたい事がある。

「……そりゃ凄い話だけど、それよりなんで同じ必要悪の教会なのにインデックスを追い駆け回してんだよ」

なぜ仲間の魔術師であるはずが、インデックスに悪い魔術師扱いされているのか。

「それともインデックスが俺達を騙してんのか」

が、それは信じ難い。信じたくないと言ってもいいだろう。それを利用してしようとしただけなら、蒼空と上条を庇うために危険を冒して背中を斬られた理由が分からない。

「……、彼女は、ウソをついてはいませんよ」

神裂火織は一瞬だけためらって、答えた。

まるで息が詰まったように、心臓が握り潰されたように、答えた。

「何も、覚えていないんです」

「は、あ……？」

「私達が同じ必要悪の教会の人間だという事も、自分が追われている本当の理由も。覚えてないから、自分の中の知識から判断するしかなかった。禁書目録を追う魔術師は、10万3000冊を狙う魔術結社の人間だと思うのが妥当だ、と」

確かにインデックスは、一年ほど前から記憶を失っているらしい、という話を。

いやそもそも、

「ちよつと待てよ。アイツは完全記憶能力を持つてるのになんで覚えてないんだ?」

それは神裂に問いかけた訳ではない。つい口から出てしまった疑問。

「覚えていないのではありません」

神裂は、呼吸さえ殺して、

「正確には、私が消しました」

つい口から出た疑問の答えは、衝撃的なものだった。

「……なんで?」

自分の声が少しだけ低くなっていた。

「その顔見れば好きで消したんじゃないのは分かる。ホントにインデックスの仲間だったんだろ。アンタだけじゃなくてインデックスもそう思ってたはずだ。だったら、なんで?」

蒼空はインデックスの笑顔を思い出す。蒼空と上条に向けた、今までの寂しさを裏返したような笑顔。

「……、そうしなければ、ならなかったからです」

「どういう意味だよ？」

「そうしなければ、インデックスが死んでしまうからですよ」

神裂の様子から、予想の一つとしてあった答えだった。予想していた最悪の答え。真夏の熱帯夜の空気が、一気に冷えたような感覚があった。

「言ったでしょう。彼女の脳の85%は10万3000冊の記憶のために使われている、と」

神裂は小刻みに肩を震わせながら、

「ただでさえ、彼女は常人の15%しか脳を使えません。並の人間と同じように『記憶』していけば、すぐに脳がパンクしてしまうんですよ」

「パンクって……、さっきお前も言ってただろ。残りの15%でも俺達と同じ性能だって」

「はい。ですが、彼女には私達とは違うモノがあります。完全記憶能力です」

神裂の声から少しずつ感情が消えていく。

「そもそも、完全記憶能力とは何ですか？」

「だから、一度見たモノを絶対忘れない能力だろ」

「では、『忘れる』という行動は、そんなに悪い事ですか？」

「……、いや」

「人間の脳の容量は、意外に小さい。人間がそれでも100年も脳を動かしていられるのは『いらぬ記憶』を忘れる事で脳を整理しているからです。——あなただって、一週間前の晩ご飯なんて覚えていないでしょう？ 誰だって、知らない内に脳を整理させる。そうしなければ、生きていけないからです」

ところが、と神裂は凍えるように告げる。

「彼女には、それができない」

「……」

「街路樹の葉っぱの数から、ラッシュアワーで溢れる一人一人の顔、空から降ってくる雨粒の一滴一滴の形まで……『忘れる』事のできない彼女の頭は、そんなどうでも良いゴミ記憶であつという間に埋め尽くされる」

神裂の声が、凍る。

「……元々、残る15%しか脳を使えない彼女にとって、それは致命的なんです。自分で『忘れる』事のできない彼女が生きていくには、誰かの力を借りて『忘れる』以外に道はないんです」

——だから、使える連中に連れ去られる前にこうして僕達が保護しにやってきた、って訳さ。

——魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが。

ステイルと神裂の台詞を思い出す。まさか、本当にインデックスを保護しようとしていたとは。てっきり保護なんて優しい言葉を使つて、自分のしている行為を誤魔化そうとしているだけだと思つてた。

「……つまで。いつまで、なんだよっ。」

蒼空は、聞いた。

神裂の様子を見て、否定する気は起きなかった。質問してしまったという事が、何より認めたとという事だ。

「インデックスの脳の限界は、いつなんだ？」

「記憶の消去は、きっかり一年周期に行います」

神裂は疲れたように、

「……あと三日が限界です。早すぎても遅すぎても話になりません。ちようどその時でなければ記憶を消す事はできません。……あの子の方も、予兆となる、強烈な頭痛が現れていなければ良いのですが」

「二年……」

確か、インデックスは一年ほど前から記憶を失っている、と言っていた。

そして、頭痛。——蒼空はてつきり、回復魔法の反動でインデックスが倒れたと思っていた。事実、その場で魔術に一番詳しいインデックスがそう言ったのだから。

だが、インデックスが何か勘違いしていたとしたら？

もう彼女は、いつ頭が壊れてもおかしくない状態で動き回っていただけ、だったら？

「分かって、いただけましたか？」

神裂火織は言う。瞳に涙はなく、そんな安っぽい感情表現すら許さないという感じだ。

「私達に、彼女を傷つける意思はありません。むしろ、私達でなければ彼女を救う事はできない。引き渡してくれませんか、私が魔法名を名乗る前に」

「……、っ」

蒼空の目の前に、上条とインデックスが楽しそうに話す姿が浮かんだ気がして、奥歯を噛むように目を閉じた。

「それに、記憶を消してしまえば彼女はあなたや上条当麻の事も覚えていませんよ。今の私達を射抜く目を見れば分かるでしょう？ あなたがどれだけ彼女のために行動しようと、目覚めた後の彼女には、あなたの事は『10万3000冊を追う天敵』にしか映らないはずですよ」

「……」

「そんな彼女を助けた所で、あなたにとって何の益にもなりませんよ」  
「……、別に得とか損とか、そんなつもりで助けた訳じゃねーよ。それに、お前らにはできなかったかもしれないけど、何回忘れようが、カミヤンなら何回でもインデックスの味方になるはずだ！」

自分の、何より上条の今までの行動が否定されたようで、段々と声が大きくなる。

「……」

「アイツなら何回でも誤解をといて、インデックスの手を掴む。ましてや敵に回るなんて真似は絶た」



「うるっせえんだよ、ド素人が!!」